らそれを消してしまふのに忍びないからなのであらう。

私は「照葉懺悔」について、その本を出した騒人社主人村松梢風君のところへこんなことを書いて送つたのを想ひ起す。

『村松梢風兄。御恵贈の「照葉懺悔」有難う存じました。私はこの本を見ると、何よりも先に數年前大阪の南地の河合の酒場で會つた、斷髪洋裝の作者の姿が浮んで來ると同時に、その時飲まされたミリオンダラーカクテルの不思議な味を思ひ出して、久米氏の所謂微苦笑を覺えてゐたのですが、しかしだんだん讀んでゆくうちに、すつかりそんなことは忘れてしまふほど、感心させられてしまひました。兎に角少し達者過ぎると思はれる位の才筆です。サンデー毎日で讀んだ時は、それほどにも思ひませんでしたが、かうして一冊にまとめられたのを讀んで見ると中々面白い。ああいふ狹斜の世界に於ける「嘘」や「金」に對する考へ方にも、至極御同感の次第であります。要するに「金春日記」と「續金春日記」の大半はお客と姉さんに向つてのタンカですね。タンカの切れ味のいいところが、讀んで

面白い所以なのでせう。

しかしそんなタンカと云つたやうなことでなく、私が一番感心したのは、唐崎と云ふ厭なお客に連れられて大阪に往き、昔の友達に誘はれて浪花座に往つてからの描寫です。「照葉さんの書く物が人の心を動かすのは、それが全部事實だからである」と、あなたも序の中で書いておいでですが、全く私もこの邊の描寫には、かなり心を動かされました。醉つて前後不覺に倒れてしまふあたりもいいが、その翌朝弟に會ひに往くために辻待の俥に乘つて、車夫といろいろ話し合ふところなぞは、讀んでゐてちよつとほろりとさせられます。

それからまた私が、この「照葉懺悔」の中で、別の意味で興味を感じたのは、小室欽一――それは無論小村欣一君に違ひない――といふ外務省に出てゐる若い侯爵との間の淡々たる戀の條です。こんなことをいつたら小村君は怒るかも知れないが、如何にも小村君の若い時らしい、青年外交官の風貌が躍如としてゐて面白かつた。

兎も角も「照葉懺悔」一卷は「ミリオンダラー」以上のものです。それは多少あの晩飲まされたカクテルのやうな不思議な甘つたるさはありますけれど、しかしこれには社會惡に反抗するけなげな痛快味と、人生の暗さをかこつ悲しげな辛酸味とがあります』

私がこんなことを書いたのも、もう既に二十年前の昔であるから、私自身の境涯にも幾變遷があつたやうに、彼女の身の上にこれほどの變化があつたことも、別に驚くやうなことではないかも知れない。

しかし私は嵯峨に往つて、わざと祇王寺をおとづれずに、月の夜道を歸るやうな時には、何となく人生の無常といつたやうなことが、痛切に感じられてならなかつたのである。

句佛

句三昧心うつつにあるときも祖師の紙衣を忘れたまふな

私が大谷句佛上人に始めてお目にかかつたのは、昭和十六年の四月上旬、京都蹴上の都ホテルに於てであつた。高雅な風貌はまことに句上人らしい氣品があり、いろいろ話し合つてゐるうちには、その胸の奧底にある深い感懷にも觸れることが出來て、何ごとも打ち解けて話し合へるやうな親しみが感ぜられた。

その時は「中外日報」社主眞溪涙骨翁を交への、三人鼎座の座談會であつて、丁度その頃はこのあたりで、比良八講と稱してゐる寒い風の吹き荒れてゐる最中だつたので、話はまづ句佛師の比良八講にかかはる傳說から始められたのであつ

た、その傳説といふのは琵琶湖の出來事で、女の方から盥舟に乘つて男の方へ通つてゆくうち、或る晩目あての灯が風のために消されてしまひ、そのため到頭溺れ死んでしまつたので、その恨みでいつもこの頃には、比良颪が吹き荒れるといつたやうなことだつたやうに思ふ。

話はそれから歌や俳句のこと、獨山、峨山、兩和尚のことから、酒や煙草の話になり、結局句佛といふ雅號の由來といふことになつたが、それは「句を得て先づ佛に供す」といふ言葉が何とかいふ經文の中にあつて、それから取つたものだといふことであつた。

私が昔「枳殻邸霞のなかにうづもれぬ句佛が春の句を思ふとき」といふ歌をつくつたといふ話をすると、句佛師はそれは面白いといつて笑つてゐたが、何にしてもその日の座談會は、とりとめはなかつたけれども樂しかつた。三人とも天下の拗ね者であることは、その當日の感想をうたつた句佛師の「花ちかき日の雪集ふへちもの等」といふ句がよく現してゐる。

私のところへ回天堂主人田村敬男君から句佛師の句集「夢の跡」が屆けられたのは、それから二三ヶ月ほど經つてからのことで、私は先づそれを手にするなり、その豪華さに驚かされた。「夢のあと」と句佛師自筆で書かれてある、桐箱の蓋を開けると、本願寺裂緞子の帙があつて、それを開けると中からは上人愛用の法衣と袈裟を剝ぎ合はせた美しい表紙が現れて來る。本文は全部越前の別漉雁皮紙であつて、それに上人自選の千貳百句が、自筆そのままに印刷せられてあるのである。

序文には「去來が奥羽の旅寢の夢の跡なつかしといひけるに憶を起し夢まぼろしの如きわが往事を顧みてかくは名づけぬ」といつてあるが、更にまたその最後の「蕉や村や見よ見よ盃の夢の跡」といふ句によつても、句佛師のその句集に對する感慨の一端が分るやうな氣がする。

ここにその「夢の跡」の中から、私の心に觸れるところのある句をいくつか擧げて、わが獅子窟上人をしのぶよすがとしよう。

人日や去年の蠅來る陽の疊

いぶり炭とりし跡見る春寒し

歩中吟

水底にゆく水うつる春日かな

菜の花や重たき足の土埃

默々と飯食ふ癖や五月雨るる

蚊帳を出て佐渡の別れの今日となる

順徳院の御製とてかくまでに身のあたたまる草の實を稗の粥とは誰かいふらんと曰ふをききて

稗つくや眞野の山里閑古鳥

薄倖の友の來りて

泣きにゆくと嵯峨へ誘ふや暮の秋

偶成

もの思ふ口には笑ふ秋の風

聞きなれぬ鐘の音きこゆ雪の暮

顔見世やことに時雨るる宵の口

因にいふ。この本は昭和十年八月、京都政經書院の出版であつて、定價は金百圓である。

老櫻

老いらくの櫻あはれと思へどもものの命はせんすべもなし

或る春の夜のことであつた。圓山の枝垂櫻も、もう既に年が老いて、花を見られるのも今年限りだらうといふやうな、寂しい噂が傳へられたので、私は散歩の

脚を、四條通りから八坂神社を通り拔けて、そつちの方へ延ばしたことがある。

丁度都踊のある時分だつたので、四條通りにはずつと繋ぎ團子のついた紅い提灯がつづき、一力の角を曲つた花見小路は、踊を見にゆく人で賑はつてゐたが、八阪神社の境内に入ると、まだ夜寒を覺える頃だつたせゐか、思つたよりも人出が少かつた。いつも出てゐる玩具、人形などの露肆の前を通り過ぎて、參詣をすましてから裏手へ拔けると、そこはもう直ぐに圓山公園で、花見客相手の店は並んでゐるが、何處も森閑としてゐて寂しかつた。しかしそこにある枝垂櫻の姿から考へて見ると、むしろこの寂しいことが、このあたりの夜の境地にふさはしいやうな氣がした。

おそらくは樹齡數百年になるだらうと思はれる、かういつた老櫻になつて見ると、榮華の果といつたやうな寂しさも感じられるが、ぢつと見てゐるとそれよりももつと深い、幽玄の氣がひとりでに感じられて來て、名人として語り傳へられてゐる能面師、氷見宗忠の作に成る古い面でも、見てゐるやうな心持がする。陰

欝ではあるけれども、何處か底光りのした美しさ、とでもいつたらいいであらうか。何となく奥の深い、高雅な寂しさが樹全體を押し包んでゐて、光琳や宗達あたりの國寶級の作品に見られるやうな美しさが、ひしひしとこつちの胸に迫つて來る。

この老いた櫻から感じられる幽玄の氣は、何處か世阿彌の藝術とも相通ずるところがあつて、若しこの櫻に精があつたならば、緩やかな鼓の調べにつれ、髪白き老女の姿に形を假りて、しづしづと橋がかりと思はれるあたりから、歩むともなく現れて來るのではないだらうか。私は篝火の燃えさしが、炎の雫のやうにこぼれ落ちる傍に彳みながらも、ぢつと目を閉ぢて心しづかに、さういつた幽艶な老女の姿を思ひ描いてゐたのであつた。

それにつけてもこの老櫻が、既に瀕死の狀態にあるといふことは、何といつても悲しむべきことでなければならない。そこに點された青白い人工的な燭光で見ると、一層さういつた哀れさが感じられたが、しかしその根元のところに植わつ

てゐる馬醉木の花の純白で若々しいのを見ると、結局古いものの滅びることは如何することも出來ないといふことを、思はないではゐられなかつた。

私はこころ寂しく眞葛ヶ原の方へ向つて歩いて往つた。

瓢　亭

瓢亭の朝粥すすり松に吹く風の音聽けば心すがしも

南禪寺の瓢亭は、相變らず昔ながらの掛茶屋風の表構へで、店先の古びた柱には編笠がかかり、煤いろになつた天井からは二三足の草鞋がぶら下がつてゐる。この草鞋はそこの繪葉書に主人曰くとして「一休宗純和尚一日南禪寺に詣づるの途上、破草鞋を更へんとして茅屋に憩はせらる、亭主因みに問ふて曰く、行人に

之れを施さば其德奈何、和尚笑ふて曰く、功德なしただ簷下に挂けて人の看るに任さば足ると、これより瓢亭の店頭草鞋をかくるを以てならはしとなる」とその由來を書いてあるのによつて見ると、ずゐぶん昔からかうしてぶら下がつてゐるものなのであらう。兎に角私が始めてこの草鞋を目にしてからも、もう既に三十數年といふ長い歳月が過ぎてゐる。

しかし私がこの瓢亭のもの寂びた座敷や庭などに、心から親しみが感じられるやうになつたのは、數年前に土佐から京へ移つて來てからのことで、それといふのがやつぱり自分の年齢だとか生活だとかいふものが、漸く老殘枯淡の境涯に入つて來たためではないかと思ふ。私が洛北に居を定めたのは、昭和十三年の秋のことだつたから、まだその翌年の夏あたりは、ここで有名な朝粥もあつて、錢形をした石から湧く水の音を聽きながら食べるその味は、何處かに茶禪三昧といつたやうな、うき世離れのしたところがあつた。

日かういふ瓢亭で、最もふさはしい會合だと思つたのは、昭和十六年七月二十六

日佛印へ交換教授として赴いてゐた木下杢太郎君の入洛を迎へて、二三の舊友が集まつた時のことで、みんな久しく會はないもの同士なので、話はひとりでに二十年、三十年前の昔になり、果は一友の携へて來た、古原稿を綴ぢ合はせたものに、何か題簽を書けといふ始末。致し方なしにちび筆を取り上げて、まづい字を書いたものの、旅の恥ならぬ昔の恥は、搔き捨てといふ譯にもゆかなかつた。兎に角その夜は舊友ばかり、いろいろ昔がたりに耽つたことは、ところが瓢亭であるだけに忘れがたい。

それにこの瓢亭の女將は、昔祇園で桃龍といつてゐた舞妓であつて、私は二十數年の昔「祇園双紙」といふ歌集の中に、こんなことを書いたことを、今さら少し恥しいやうな心持で想ひ起す。

「桃龍の美しさは、祇園にゐるので始めてはつきり感じることが出來る。といふのは東山が京都にあつて、始めて明媚に感じられるのと、同じやうな譯なのであらう。それでも時々桃龍は、物思ひに沈んでゐるやうに見える時がある。うつと

りと何か考へてゐる時の桃龍の顏。それは春が闌であることを人に知らせるやうな表情であらねばならぬ」

事實その頃のここの女將は、夢見るやうな顏付の美しい舞妓で、このもの寂びた瓢亭とは、およそ緣遠いものであつた。ここにも時の推移があるといへやう。

洛北散策

秋成(あきなり)が歩みし道もありぬべし夕(ゆふ)たもとほる淨
土寺の里

洛北に居を定めてから、自然私は散歩に時を過すことが多くなつた。

大抵の場合、山中越えにかかる白川道を、ずつと東の方へ向つて歩いて往つてから、一乘寺の方へ通じてゐる廣い道路を北へ折れて、遠くなだらかに低まつた

洛外の盆地の向ふに、鞍馬や花背方面の北山が聳え立つてゐるのを望みながら、今度はまた田圃道の間を西へ曲り、松ヶ崎の方へ流れてゆく疏水の支流に架けられた、橋を渡つて歸つて來るのを例としてゐるが、それでも日により季節によつては、或ひは銀閣寺の前から法然院の方へ出るとか、農大の構内を通り抜けて、吉田山から黒谷眞如堂の方へ出るとか、時には瓜生山の上を尾根傳ひに一廻りして、勝軍地藏にお詣りをして歸つて來るとか、一乘寺の方まで足を延ばし、蕪村の墓や芭蕉庵のある金福寺に寄るとか、或ひは更に詩仙堂の前を通り過ぎて、十數町位あるかなり急な山道を、狸谷の不動まで登つて來るやうなこともあるのである。

兎に角散歩といふことは、私の洛北生活とは、離すべからざるものであつて、かりそめに書きつけた日記を開いて見ただけでも「午後鹿ヶ谷南禪寺方面散歩」とか「夕刻圓山眞葛ヶ原方面散歩」とか「岡崎の美術館を見たる後、知恩院境内より圓山散歩」とか「夕刻より叡山電車に乘りて八瀨にゆく」とか、かなり私の

散策區域が廣い方面にわたつてゐることが分る。

上田秋成の「膽大小心錄」を讀んで見ると、秋成自身のことだらうと思はれる「翁」と稱する人が、或る日狐に化かされて、鴨川堤の庵を出てから、銀閣寺、吉田山、白川の里、淨土寺村のあたりを、道に迷つてさまよひ歩くさまが書いてある。秋成は現實生活の不平不滿からかへつて、狐が人を化かすといつたやうな夢幻的なことを信じてゐたものと見えて、こんなことを書いた後で、さういふことを否定する學者を「笑へ笑へ」とばかり嘲つてゐる。が、事實今私の住んでゐる白川の里あたりは、昔から花賣女の出るところとして聽えてゐるだけに、何處もかしこも花畑だらけで、如何にも菜の花に夕日のあたつた春の日暮などには、何處かそこらの草蔭に狐が長々と眠つてゐさうな、いくらか妖氣を帶びたのどけさが到るところで見られた。

折角かうして洛北に居を定めたからは、京都の風物や年中行事などを、歲時記風にうたつたものと、古い歷史を持つてゐる京洛の地には、殘つてゐる史蹟もか

なり多いから、それを廻つて歌にしたものと、この二つだけは是非まとめて置きたいと思つてゐるが、さうなると私の散歩も、決して徒勞ではなかつたといふことになる。が、何といつても疎懶な私のことであるから、この二つがまとまるのも、數年先のことになるであらう。

春硯

見てあれば煙雨のごときもののいろ硯の面に
現れてしたしも

常に私が愛玩して、棚の上に置くところのものに、未央宮の瓦硯がある。
これは都府樓の瓦などよりも、硬度が密であるやうに見えるから、墨色もきつと濃やかで潤ひがあるだらうと思はれるが、まだ一度も使つたことがない。

裏面には「未央宮東閣瓦」としてある傍に、酇侯蕭何監造としてあつて、ぢつとこの硯を眺めてゐると、春草離々たる故宮の跡に、滅びたるものの悲しさを見よとばかりに、散らばつてゐた頃のさまが思はれて來る。
猶表面の墨池の上のところにも、沂翁書としてある一文が刻まれてあつて、それに目を注いでゐるときれぎれながら「阿房道墟未央斷零基跡荒蕪甄陶遺精」といつたやうな文字を讀み取ることが出來る。はつきり意味は分らないながらも、その文字から感じられるところは、ただ蕭條たる思ひであつて、見てゐるとおのづから深い感慨を覺えずにはゐられない。そのほかこの硯の面の左右のところに「清玩」とか「珍藏」とか刻んであるのは、これまでにこの硯を所藏してゐたものが、愛惜の情を籠めて彫らしたものなのであらう。
私は硯のことについて、殆ど何の知識もないので、傍にあつたさういふことを書いた本を開いて見ると、次のやうなことが書いてある。
「古來文房具の中で硯は文房具の王と云はれ、他の筆紙墨よりも一段上に置かれ

てゐる。文人趣味の上から云つても、宛然軍人がその劍を愛し、美人がその鏡を愛すると同樣に、文人はこの硯を愛するのである。從つて支那の愛硯家は、每朝起きて自分の顏を洗ふ時、微溫湯を以てその硯面を洗つてやると云ふ位に之を愛撫してゐるのであるから、愛硯の趣味ばかりは第三者のものから容易に之を批評することは出來ないのである」

これで見ると愛硯家といふものは、餘程特異なものであつて、その名硯に對する鍾愛の情には、他から窺ひ知ることの出來ないやうな、深い神秘的なものがあるものらしい。

その本には杭州の西湖畔に住む白眉翁といふ愛硯家のことが書いてあるが、それによるとこの老人は、每朝五點鐘に床を出ると、廊下の日當りのいいところで湯を汲んで硯を洗ふことをその日の日課として、硯面に現れる紋樣を見ては、喜んでゐたといふことであつて、その心境のしづけさには、何となく心を打たれるものがある。

硯の種類も、端溪、羅紋、紅綠、蒲江などの外に、瓦硯、玉硯、沙硯、鐵硯、陶硯、玻璃硯、漆硯、泥硯などいろいろあるさうであるが、これも私には唯瓦と石との別が分る位のもので、殆ど何等知るところがない。

棚の上の硯の方を見ると、前年の暮に、柱に掛けた獅子口に挿したまま、忘れたやうになつてゐた結び柳が、何時の間にか芽を吹いて來たが、その葉の尖がこの硯に觸れるのも、もう二三日のことであらう。

夢二の繪

亡き友が描きたる墨繪ながめつつ信濃の山を
寂しみにけり

それから又、私が時々この洛北の家の床に掛けて愛藏してゐるものに竹久夢二

君畫贊の一幅がある。

それは箒をひとつ描いた墨繪のうへに「鳥渡る尖りし山を暮れ殘し」といふ自作の句を書いたもので、多分十數年前私とともに、みすずかる信濃路を旅した時に、ありのすさびの筆にまかせて、描き棄てたものではないかとおもふ。

その淡々たる墨のいろは、昔華やかだつた抒情畫家の描いたものと思はれないやうなもので、見てゐると何となく愴然たるものが感せられるあたり、今の私には親しみぶかい。

蒼茫として暮れてゆく信濃路の山。空遠く消えてゆく渡り鳥の群。さういつた追憶の風景を思ひうかべながら、この寂しい幅の前に座つてゐると、私には夢二君とともにした、いろいろの旅のことが思ひ出されて來た。

私が夢二君とともにした旅は、昭和四年二月、直木三十五、白鳥省吾等六七人とともに北陸の温泉めぐりをした時が最初だと思ふ。その時は七日の夜東京驛を出發すると、翌日の朝米原で北陸線に乘り換へ、その日の午過に目的とする山中

温泉に着いたのであるが、夢二君はその間殆ど一人、一行の者たちとは別になつてゐて、ひどく寂しさうに默り込んでゐた。後でこれは別に孤高を氣取つてゐるわけではなく、夢二君が持つて生れた寂しい性格だといふことが分つたけれども、港屋以來の古い交際にもかかはらず、私はまだその頃まで何となく親しみがたいものを感じてゐたのである。

山中温泉ではよしのやに泊つたが、その晩はそこの大廣間で歡迎を受け、民謠詩人白鳥省吾君の踊りが出るやら何やらして、思ふ存分醉つたうへに、いやになるほど山中節を聽かせて貰つた。

　薬師山から湯座屋を見れば、シシが髪結ふて身をやつす
浴衣肩に掛け戸板にもたれ、足でのの字を書くわいな
　飛んでゆきたい蟋蟀の茶屋で、戀の棧二人づれ

さういつた温泉情調豐かな唄が、續けさまにうたはれてゐる間、夢二君は何を考へてゐるのか、やつぱり默々として杯を啣んでゐたが、そのうち次の間に二枚

折の屏風が持ち出されると、夢二君はそれにこのあたりの風景らしい山の繪を描き、私が何かそれにふさはしい歌を書き加へることになつた。が、私はもうその時分には、醉眼朦朧としてゐて、自分でも何を書いたか、まるで記憶には殘つてゐない。

夢二君とはその後伊香保から高崎の方面へ、やつぱり五六人づれで往つたことがあるが、同君が榛名湖畔に山荘を作る望みを起したのも、やつぱりこの時の旅が機縁になつたのではないかと思ふ。この時は高崎で文藝講演會などがあり、同行者の中には三上於菟吉、直木三十五などがゐたのを覺えてゐる。

かういふ旅で最後になつたのは、長野、松本、甲府といつたやうに、信濃路から甲斐路へかけて出かけた時で、今「月明」といふ日本の文化生活を中心とした趣味雜誌をやつてゐる山崎斌君に案内された旅だつたが、この時の夢二君はひどく元氣で、講演會の壇上に於ても、酒席の杯盤狼籍の中に於ても、何處か颯爽としたところがあり、以前のやうに默々とした寂しい姿は見られなかつた。

最初はやつぱり五六人の一行だつたものが、歸りは夢二君と私と二人きりになり、いくらか旅愁を感じながら、汽車の窓から信濃路の山々を眺めて、貰つた豆腐の田樂を肴に、ちびりちびり冷い酒を飲んでゐたが、そんなことも今ではもうかへらぬ思ひ出となつてしまつた。

回顧篇

高輪の家

道ばたの栗を拾へば高輪の家見え八歳(やつ)のわが
姿見ゆ

私が少年時代を過した高輪の家は、海岸からは十數丁離れた、丁度東禪寺の上あたりの小高いところにあつたから、二階に上がると庭の木立の梢の向ふに、お臺場がまるで島のやうに浮んだ品川の海が見渡された。空が晴れた日には、遠く安房上總あたりの陸の影が、澪標の向ふにはつきりと見えて、伊豆通ひらしい小さな汽船が、のどかに煙を吐きながら通つてゆく。海の上には船の帆影も數多く見えてゐたが、第三臺場の白い燈臺に、灯が點る時分になると、それもみんな見えなくなつてしまつて、遠く品川の停車場を、今出たらしい汽車の響が、夕闇を

通して聽えて來る。もうその時分にはさつきまでしてゐた橐駝師(うゑきや)の鋏の音もばつたり絶えて、山の手の屋敷町はひつそりと眠つてしまつたやうに靜かである。

私はこの高輪の家といふと、まづ土用中の蟲干を思ひ出す。大勢の人の手によつて土藏の長持や簞笥の中から運び出される數々の品、芝居で見るやうな猩々緋の火事裝束、美しい刺繡をした裲襠、黒糸縅の重い鎧、金いろの紋のついた具足櫃、源平の合戰圖、社寺緣起なぞを描いた幾雙かの繪屏風、古代衣裳、櫛、笄、まだその外いろいろのものが、風通しのいい座敷一杯掛け列ねられたり並べられたりしてゐる光景は、今もまだ目に殘つてゐるが、これもかへらぬ夢に過ぎない。

この華やかな土用干が過ぎると、直きに雉子の宮の宵宮が來て、それから間もなく秋が來るのだが、その頃のことで思ひ出されるのは、よく甲蟲を採りに往つたことのある二本榎の栗林である。そこは大久保の原と呼ばれてゐたところの一部で、私の家から二三町しか離れてゐなかつたが、木立が鬱蒼と茂つてゐて、谷を隔てて屠牛場があり、更にもう少し雑木林の中を通り拔けて往くと、誰かの屋

敷の中に取り入れられて鴨場となつてゐる、大きな古い池があつた。栗林からこの池のあたりは、私の少年時代の遊び場であつて、思はず歸るのを忘れて遊び過した夕方、哀音を含んだ明治學院の鐘の音が、微にひびいて來るのを聽いた時の心持は、いまだに私には忘れられない。

御殿山、白金の清正公、庚申堂、ぼら横丁、そのほかまだいろいろとこの高輪の家をめぐる土地のことについて、語りたいことも多いけれど、みんなかへらぬ夢がたりだと思ふと、今さら何を言つても仕方がないやうな氣がする。が、もうそろそろよしなき回顧癖を棄てなければならないと思ひながらも、夜深く目が覺めて不圖胸に思ひ出されるのは、近來殆んどかういつた少年時代のことばかり。これも私が何時の間にか、老境に入つたためなのであらう。

遠き日

母若く眉目よくましきわれ小さく疳高かりき
その日遠しも

子供の時分の私は體が弱く、都會生活にも堪へられなかつたと見えて、當時鎌倉の材木座にあつた父の別莊から小學校へ通つた。

その頃の鎌倉といへば、避暑地としてやつと或る一部の人に知られてゐるばかり、別莊のやうなものも松林や砂山の間に、點々として數へられる位しかなかつた。それも父の別莊のあつたところは、材木座といつても町からは大分離れた、海岸に近い松林の中にあつて、傍にはキヨソネといふ伊太利人の畵家の家があるきりだつた。

私は母と二人でこの別莊に住まつてゐたのだが、小學校は鎌倉師範學校に附屬したもので、鶴ヶ岡八幡宮の傍にあつたから、ここからはおよそ一里餘りの道を、毎日往復しなければならなかつた。丁度その頃別莊番に、まだ頭には丁髷を載せてゐる老僕がゐて、それが送り迎へをしてくれたが、そのうち父が一匹の驢馬を私のために送つてくれたので、往復ともそれに乘つて通學をするやうになつた。もう今では何處かへ見えなくなつてしまつたけれども、數年前までは私がその驢馬に乘つた、まるで小さなドンキホーテといつたやうな恰好の古寫眞が、私の手もとに殘つてゐて、見る度ごとにその時分のことが思ひ出された。

私がかうして鎌倉の小學校に通つてゐたのは、およそ一年位のもので、母も私も再び東京住居をするやうになつてしまつたのだが、その後も春とか夏とかの休みには きつと鎌倉へ出かけて往つて、海で泳いだり、釣をしたり、砂山へ登つたり、蟹捕りをしたり 樂しく愉快な時を過した。驢馬は私達が東京へ引き上げてのち間もなく、この頃父が經營してゐた北海道の農場へ送られてしまつて、も

うそこにはゐなかつたが、丁髷の老僕はまだやつぱり別莊番として、庭掃除や走り使ひの役を勤めてゐた。

低い竹垣を隔てた直ぐ隣りの、伊太利人の畫家の家では、向日葵がひどく好きだつたと見えて、垣根の傍にも洋館の周りにも、それが一面に植ゑてあつて、夏になると金色をした大きな花が、いくつもいくつも眩しい位咲きさかつてゐた。それを見ながら砂山の上に登つてゆくと、丁度滑川の川口のところが直ぐ眼の下に見えてゐたが、そこらはこの由井ヶ濱の中でも、最も潮流の惡いところで、上から見ると海の色も何處か不氣味に變つてゐた。

かうして私が鎌倉で過した少年時代も、もう今では遠い日の夢がたりに過ぎないと思ふと、今さらのやうに過ぎ去つた人生行路のあとがかへりみられる。

○

かへらぬ夢

わかき日のかへらぬ夢も年老いてふたたびか
見る時あらむかも

私が文學に趣味を持ちはじめて、歌や詩を作るやうになつたのは、中學の一二年の頃からだつたが、芝居とか寄席とかいつたものに、興味を感じ出したのは、それから二三年經つてからだつた。

寄席に通ふやうになつたのは、府立一中から攻玉社へ轉校してから間もなくのことで、それも落語、講釋、浪花節などならまだいいのだが、その當時は源氏節の女芝居が全盛時代だつたので、娘手踊と稱してゐたさういつた一座の懸かつてゐるところばかりを見て歩いた。何しろその當時の源氏節芝居の流行といへば凄

じいもので、京橋、日本橋あたりのかなり名のある一流の寄席までが、この名古屋から進出して來た娘手踊の一座を懸けてゐた。それだから私の住んでゐた芝や麻布界隈は、殆んど何處も岡本何とかいふ看板ばかり、中でも美根吉、美根松美住登女なぞの一座は人氣があつて、小美根などといふ女は　凄いやうな美人だつた。狂言は「兩面藤三」だとか「肉附面の由來」だとか、「島千鳥」とかいふものを多く出したが、「熊谷陣屋」「阿漕の平治」「辨慶上使」などといふやうな大物も、狭い高座を舞臺として演じた。私は毎日のやうに寄席通ひをしてゐるうちに、だんだんかういつた夢幻劇の世界にあこがれるやうになり、到頭それが私の一生を支配するやうになつてしまつた。

かうした源氏節芝居がきつかけとなつて、もう中學を出る時分には、寄席などでは滿足が出來ずに、先づ宮戸座などから始めて、せつせと劇場通ひをするやうになつたが、ひとつにはその頃荒木芳男君といふ、無類の芝居好きの友を得たからでもある。

荒木君のことは以前「耽々亭劇談」と題する一文中に書いたことがあるからそれを引かう。

『そもそも最初私を、この宮戸座へ連れて往つて呉れたのは、その時分「明星」に簡素な筆で、巧みに役者の顔や形の特徴を捉へた芝居スケッチを、毎號のやうに出してゐた荒木芳男君だつた。同君は私に宮戸座の芝居が如何に面白いかといふことを説き聞かせた後、或る日の夕方わざわざ伊皿子坂上の家に私を誘ひに寄つて呉れた。で、私は荒木君に連れられて、伊皿子坂下から雷門前まで鐵道馬車に搖られて往つて、始めて古風な櫓を上げた宮戸座の木戸を潜つたのであつた。忘れもしないその時見た芝居は『三人吉三廓初買』で、私達が土間に入つた時舞臺の上では、菊四郎の土左衞門の傳吉が煙草盆を前に置いて、「寢てゐる姿を見るにつけ、思ひ出すのはこの身の惡事」といふ言葉に始まつて、「積る惡事の〆高に、算用される閻魔の帳合、はて怖ろしいことだなあ」といふ言葉に終る長い述懷に、わが身の因果を喞つてゐた。和尚吉三が故人壽美藏、お坊吉三が後に工

左衞門となつた先代鬼丸、お嬢吉三が今の源之助だつたと覺えてゐる』

これから私はすつかり宮戸座が好きになつてしまつて、これまで見たことのなかつた夢幻の世界が、この世にあることを知るやうになつたのであつた。

蘆荻抄

いまもなほ耳に殘れる荒川の岸邊の蘆の葉摺
かなしも

「その時分私は田端のさきの、荒川の河岸に臨んだ廢屋のやうな大きな西洋館に住んでゐた。その家は父が或る事業の舊跡として殘つてゐたもので、私がまだ年の若い、詩人らしい空想から、好んで唯一人ここに引き移つて來たのは、二十二の冬もまだ始めの時分であつた」

私は「河霧」と題する短い文章の中でかう書いてゐるが、この荒川の河岸にあつた家といふのは、父が或る事業に手を出して失敗した記念物であつて、高く煉瓦を積んだ上に建てられた、灰色のペンキ塗の木造洋館の二階家の傍には、機械も釜も赤錆だらけになつた工場が一棟、まるで何かの殘骸のやうに横たはつてゐた。洋館と工場との間には、河から水を引き入れた堀のやうな池があつて、掻い堀りをすると泥の中からは、眞つ黒な貝がいくつも出て來たが、誰も氣味惡がつて食べるものがなかつた。一帶にそこらは濕地だつたので、工場の裏の日蔭には、毒だみの花が青白く咲いた。

私がこの河岸の家に引き移つて來てから、自分の書齋として選んだのは、その廢屋のやうな西洋館の二階の一室で、窓はみんな河の方へ向つて開かれてゐるので、部屋は極めて明るかつた。が、何しろ數年の間誰も住んでゐなかつたので、そこらには陰氣な黴のにほひが沁み込んでしまつてゐたし、天井や壁には雨漏れの痕が方々にあつて、見るからに幽靈屋敷といつたやうな感じだつた。電燈がな

いので夜になると蠟燭を點したが、仄黄いろいその光はかへつてこの家にふさはしく、机のうへに點々と滴れた蠟涙の痕も、むしろ私には懷しかつた。

私はもうその時分から、何處かに孤獨癖があつたものと見えて、さうやつて唯一人そんな家で、蠟燭の灯を賴りに暮らしてゐるやうな生活も、かへつて自分には樂しかつた。その時分私は國木田獨歩の「武藏野」が好きで、幾度繰り返して讀んだか分らないほどだつたから、讀書に倦きるとは雜木林の多い、そこらの田圃道を歩き廻つて、「林の中に入り、草を藉いて座し、凩の音に耳を傾く」といつたやうな、「武藏野」の中にあつた文句を、ひとり胸の中で思ひかへした。

私はかうした散歩にも倦きると、よく河岸に彳んで、ぼんやり河の面や向ふ岸を眺めて時を過した。何處か遠くの工場の汽笛が、風につれてひびいて來る外には、何のもの音も聽えて來ないやうな、靜かな時が多かつたが、さういふ時には岸に近い蘆の葉摺れも耳についた。

この歌はその頃の自分を、思ひかへして作つたのである。

啄　木

北海の寒さをかたる啄木の寂しき眉を見るよしもがな

私が石川啄木君と最も親しく交つたのは、明治四十一二年の頃、共に「昴」の編輯に從つてゐた時代のことであつた。

勿論石川君と私とは、その數年前に新詩社の歌會の席上で知り合ひになつて以來、屢々相見る機會はあつたのだが、同じ雜誌を編輯することになると、自然往來することも頻繁になるし、腹の底を打ち明けて意見を鬪はすやうな場合も多くなつた。當時私はかなり荒んだ生活をしてゐる時代だつたが、それでも文學だけは棄てられずに、觀潮樓の歌會にも出席すれば「昴」の編輯にも從つてゐた。「午

後三時」とか「淺草觀音堂」とかいつたやうな、象徵劇めいた戲曲を書いたのも、やつぱりかういふ暗憺とした時代のことなのであつた。

それにその頃の私の陋居と、石川君の下宿してゐた本郷森川町の蓋平館別莊とは、四五町位しか離れてゐなかつたので、私は大抵一日隔き位には、何かの用事でたづねて往つた。石川君の部屋は三階の階子段に近い、三疊位の狹い一間だつたが、そこで彼は昂然と歌を輕蔑しながら、これから書かうと思つてゐる小說の梗概なぞを、野心的な口調で語つてゐた。そしてどつちかの懷に、多少の金がある場合には、誰が誘ふでもなく本郷三丁目の寺の境內にある小さな天麩羅屋に往つて、文學を論じながら酒を飲んだ。その天麩羅屋には、女義太夫となつて寄席に出てゐる娘があつて、夕方などはその晩の出し物を浚つてゐる太棹の音が、二階の座敷まで懶うさうにひびいて來た。

やつぱりその頃のことだと思ふが、私は石川君と一緒に、二三度淺草公園の方へ遊びに往つたことがある。その時石川君は、以前與謝野寛先生や石井柏亭、伊

上凡骨、岩田郷一郎などと文士劇を、兩國の伊勢平樓でやつた時に、女優として出演してゐたモデルの女が、今藝者になつてゐるといつて、その女の出てゐる藝者家の前へ、私を連れて往つたのを覺えてゐるが、その女は石川君にかなり好意を持つてゐたらしく、その下宿にもちよくちよく遊びに往つてゐたやうだし、手紙も何通となく見せられたことが私の記憶に殘つてゐる。

石川君と私との交遊が、何時頃から絶えてしまふやうになつたか、如何も私にははつきりしたことが思ひ出せない。最初「昴」は森鷗外先生監修の下に、石川君と私と、それにもう一人平野萬里君が加はつて、三人交互に編輯するといふことになつてゐて、第一號は平野君が、第二號は私が編輯したが、石川君擔當の第三號に至つて、彼獨斷で歌をみんな六號で組んでしまつたことから、編輯者間に異見を生じ、その間が如何もしつくりとゆかないやうになつた。そんなことも二人が疎遠になるひとつの原因だつたが、そのうち石川君は東京を引き揚げて北海道へ歸り、再び上京して來た時には、もう交情は以前のやうではなくなつてゐた。

今になつてそんなことを考へると、何だか妙に寂しい氣がして仕方がない。

鎌倉日記

由井が濱藻屑もわれを歎かしむ君が黒髪まじりぬるかと

古い原稿の整理をしてゐると、「鎌倉日記」と題するものが出て來た。何時頃の日記なのかはつきり分らないけれども、中に書いてあることから見て、私が阪の下の權五郎神社の近くに、三間ばかりの小さな家を借りて住んでゐた時分のことのやうに思はれるから、多分大正二三年頃のものではないかと思ふ。その頃私がどんな生活をしてゐたか。その一節を引いて見よう。

「三月二十日。

今日は北風が烈しく吹いて、海はひどく荒れてゐる。硝子戸越しに見てゐると、海は一面に白く泡立つてゐて、荒れ狂つた浪は凄じく岸を目がけて押し寄せて來る。そしてその浪の碎ける度毎に立つ飛沫は、霧のやうに風に吹き散らされて、岸には凄じい勢で引いてゆく潮ばかりが殘る。

三日に上京して以來、ずつと家にばかり閉ぢ籠つてゐたので、私はもう少し仕事に疲れた。それにこんな日は如何も仕事をする氣にはならないで、午前中は殆ど海ばかり見て暮らしてしまつた。私は子供の時分から海が好きだ。海を見てゐると私は故郷に歸つて來たやうな心持がする。鎌倉の海は殊に私にはその感じが深いし、荒れてゐるのも悲壯でいい。

午少し過ぎに玉文堂主人新免古香氏の紹介狀を持つて山川秀峰君が見えた。同君は清方門下の畫家で、花柳章太郎などとも友達ださうだ。これから歌を遣つて見たいと云ふことで、一時間ばかり話をして歸つて往つた。」

その頃山川秀峰君は、まだ二十になるかならない位の青年だつた。同君の作つ

た歌の記憶がないところから見ると、結局歌はやらなかつたのではないだらうか。

「三月卅一日

今朝はもうすつかり風が凪いでゐた。六時半頃起きて、新聞を讀みながら海岸を散歩する。もう春になつたと云ふことは、伊豆の連山に雪が見えなくなつたのでも、海岸の砂丘に草が萠え出したのでも分つた。沖には鰤網に集まつた船が、一つところにかたまつて群がつてゐる。

家へ歸つて昨夜書いた原稿を見ると、何だか文字の幽靈を見るやうな氣がして、始めから終ひまで氣に入らない。瞞されたやうな心持がしたので、私はみんなそれを破り棄ててしまつた。

午前十一時頃葉山へ往く道に寄つたと云ふことで父上が見えた。一時間ばかり話して、直ぐに電車で鎌倉の停車場へ向つて往かれた。私は今日ここで父上から運命論を聞かされるとは思ひも掛けなかつたことだつたので、何だか不意に刀でも頬に押し付けられたやうに冷やりとした。そして父上の去られた後で、私は何

時にない寂しさを感じた。」
父が運命に就て何を語つたか。全く記憶に殘つてゐない。

凡骨

凡骨もすこやかなりやなほ刀を忘れて酒をた
うべありくや

この歌は大正二年六月出版の歌集「昨日まで」の中にある歌だから、三十年ほど前の舊作である。が、それだけにその頃のことを思つて、懷舊の情に堪へないものがある。

ここで「凡骨」といつてゐるのは、當時木版彫刻で名のあつた奇人伊上凡骨君のことである。彼は本邦藝術版畫の鼻祖といつてもいい位の名人ではあつたけれ

ども、市井の氣は骨髓にまで徹してゐたので、言語動作頗る飄逸、數へきれない位奇行に富んだ男であつた。藝術版畫に於けるその功績には沒すべからざるものがあつて、「明星」の終刊號では一頁大の肖像を掲げて、版畫界に殘した彼の業績をたたへてゐたが、彼自身もその點ひどく得意な樣子であつて、終世「藝術家」をもつて任じてゐたやうである。

私が凡骨と深く知るやうになつたのは、造形藝術にたづさはつてゐる人達を主に、詩歌人である私達も加はつてつくつたパンの會が、兩國橋に近い或る西洋料理屋の三階で催されてからのことであつて、この時凡骨はその木版の弟子である獨逸人フリッツ・ルンプとともに出席してゐたが、師匠の都々逸と弟子の猿の物眞似とは當日第一の喝采を博し、忽ちにして師弟揃つてパンの會には、なくてはならない花形役者になつてしまつた。凡骨には不思議な癖があつて、美しい自然に接するとか、愉快な音樂を聽くとか、或ひは勝負事で勝つとかする場合には、酒に醉つてゐない時でも、きつと奇聲をあげていい心持さうに都々逸をうたひ出

すのであつた。

吉川英治君がまだ川柳に隠れてゐた時分、凡骨もやはり川柳をやつてゐた關係から、彼をモデルにして「狐を馬に乘せた話」といふ滑稽小說を或る雜誌に書いたことがある。これが吉川君が大衆小說を書く端緒になるのだが、凡骨自身はモデルにされたことがひどく得意で、私も幾度かこの小說の話を聽かされたものである。事實凡骨は狐を馬に乘せたやうな男で、飄然と家を飛び出すと、五日や十日戻つて來ないやうなことは日常のことで、或る時は鄕里の四國に出掛けて往つたきり、半年以上も東京の家へは消息がなく、歸つて來て見ると何處かへ引つ越しをしてしまつた後で、方々わが家を探し廻つたといふやうなこともあつた。

今からもう三十數年前、一時素劇なるものが流行つたことがあつたが、この時彼は高村光太郎君が碎雨時代に書いた「青年畫家」といふ芝居の中に人力車夫に扮して現れ、それがまた松助張りの頗る珍なものだつたさうであるが、遺憾ながら私はそれを見ることが出來なかつた。

その凡骨も、既に逝いてから數年になる。

鴻の巣

日本橋のうつり變りもかなしかりわが身のう
へに思ひくらべて

カフェーといふと私はプランタンの次には、鎧橋の直ぐ傍のところにあつた「鴻の巣」を思ひ出す。「鴻の巣」はその後木原店に移り、それからまた日本橋の通りに四階建の家を構へるやうになつたが、しかし私が一番懷しい心持で思ひ出すことの出來るのは、何といつても鎧河岸時代である。

鎧河岸時代の「鴻の巣」といふと、私の眼にはいろいろの情景が浮んで來るが、先づ第一に思ひ出されるのは、子供のやうな小さな體に、氣取つた形の背廣を着

て、山高帽子を置いた大卓子の傍で、何か考へ込んでゐる筆名萱野二十一――郡虎彥君の姿である。私もその當時毎日のやうにこの「鴻の巣」に出掛けて往つて、或る時などは醉ひ潰れてしまつて、谷崎潤一郎君と二人でこの二階で、夜を明かしたやうなこともあつたが、しかしよく往くといふことでは、到底郡君には敵はなかつた。私達はよくここで落ち合つては、濱町界隈から淺草方面を歩き廻つた。郡君の外套の衣兜（かくし）には、目藥や胃の藥やその外いろいろの藥が一杯入つてゐて、歩いてゐるうちに不圖氣が付いたやうに、

「ちよつと待つて呉れ給へ」

といつて飛び込むところは、いつもきまつて藥屋だつた。その郡君も遂に異郷の土となつてしまつて、この世ではもう再び會ふことが出來ないかと思ふと、今更ながら人生無常の感が深い。

この「鴻の巣」では一度「歌人會」といふものが開かれたことがある。これは當時の重立つた歌人の懇親會のやうなもので、この時には齋藤茂吉、島木赤彥、

北原白秋、若山牧水、中村憲吉、古泉千樫などが出席してゐたやうに思ふが、結局私の記憶に殘つてゐるのは、牧水君の朗詠の美音だけであつて、そのほかのことは殆ど何も覺えてゐない。この會はその後數回つづいてゐたやうに思ふが、その度每に淋漓たる醉態を見せるのは千樫であつて、或る時私はその會の歸り途、何處だか二人とも分らないやうな家で、彼の青ざめた醉顏を眺めながら、徹宵杯を上げたやうなことがあつたのを覺えてゐる。

「鴻の巣」といへばそこの主人の鴻巣山人も、獨步の所謂「忘れえぬ人々」の一人であつて、鎧河岸時代から多少變つたところがあつたが、日本橋に出て來てからは、異國趣味を加へた日本畫を描いて、すつかり藝術家になりすましてゐた。兎に角カフェーの主人としては、ちよつと愉快な愛嬌のある人物だつたが、十數年前に突然病んでこの世を去つた。そしてその後間もなく「鴻の巣」といふものも、この世からなくなつてしまつたのである。

新佃

風の音に耳かたむけぬかなしみにわれも吹か
れて飛ぶここちする

風は夜に入つてから、だんだん激しくなつて往つた。

新佃の海岸にある、海水館といふ古ぼけた宿屋の一室で、灰色の壁に圍まれながらぼんやりもの思ひに耽つてゐると、私の耳には浪の響きよりも風の音の方が、一層もの寂しくひびいて來た。

ここは以前、島崎藤村氏も居られたし、小山内薫氏もゐたことのある部屋で、ちつと風の音に耳を澄ましてゐると、「苦しき人々」や「悲鳴」などのことが懐しく胸に浮んで來る。聞きやうによつては風の音も、「苦しき人々」の呻き聲と

も思はれ、息も絶え絶えな「悲鳴」のやうにも思はれるのである。

かうして私は幾時を寂しく過したらう。都會の中の放浪生活にすつかり疲れ果てた私の體は、まるでただ一人この世に生き殘つた人のやうに、ぼんやりそこに坐つたまま、かなり長い時を過してゐた。肉親のものからも友達からも、その外あらゆる人々からも、棄てられてしまつたと思はれるやうな寂しさを感じながら、さまざまのことを思ひ廻らしてゐると、ひとりでに目が潤んで來るのを如何することも出來なかつた。

壁に映つてゐる自分の影も、その夜はいつもよりはめつきりと痩せて、歎き悲しんでゐるやうに見えた。

「誰だ、そこにゐるのは」

私がさういふと、きつと影は、

「おれはお前の悲しみの影だ」

と答へたに違ひないと思はれるほど、それほどその影は痛々しかつた。

が、そのうち私には、その風の音がだんだん懐しいものに思へて來た。魂まで吹き飛ばされるのではあるまいかと疑はれるほど、吹き荒んでゐる風の音に脅えながらも、私は不圖その中に忘れることの出來ない自分の過去の姿を見た。

この海水館といふ家は、深川の方からやつて來ると、靈岸島の商船學校の前を通り、相生橋を渡つて直ぐ左へ曲ると、その突き當りの海岸の防波堤沿ひに建てられてゐて、以前何處か東北の方の料理屋の建物を持つて來たものだといふことだつたから、部屋には殆ど押入れといふものがなかつた。それで隅には四角い頑丈な置戸棚が置いてあるだけで、座つてゐても落着きがなく、何となく人の世の假の宿りといつたやうな感じだつた。

この家を最初に見出したのは、島崎藤村氏であつて、新片町のお宅から舟でここに通はれて、人目をしのぶ仕事場として居られたらしい。

晴れた日には遠くに見える房總の陸影、海の中に寂しく立てられた澪標、何處へゆくのか小蒸汽に引かれて長くつゞいた曳船の列、飛び迷つてゐる鷗の群、さ

ういつた景色が海に向つた玻璃戸の外に眺められた。

○

淺草の友

淺草にかの万太郎住みにけり女を戀へどもの
言はずけり

この歌は何時頃作つたものであらうか。万太郎といふのは無論久保田君のことであつて、同君が駒形に住んでゐた時代に、いくらか揶揄するやうな心持で作つたものだと思はれる。大正七年九月の日記を見ると、その十一日に駒形の久保田君を訪ねたことが書いてあるから、或ひはその頃のことかも知れない。兎に角その日記を引いて見よう。

『久しく會はないが如何してゐるだらうと思つて、日本橋から電車に乗つて、駒

形の久保田万太郎君を訪ねた。例の奥の二階の座敷で話す。小山内君が今日伊皿子へ引越すといふこと、この間喜多村君と辰巳あたりを六時間歩きづめに歩いたといふこと、甲羽が可哀さうだから同情するといふこと、「末枯」の鈴村さんは近頃如何してゐるだらうかといふこと、壽亭がさん馬の眞打で客が二百五十來てゐたといふこと、そんな話を聽いてゐるうちに、また例によつて近作の發句を聽かされる。

燈籠や縁に馴れ寄る夜の犬

猫八の鳴くこほろぎや冬隣

濡れそめて明るき屋根や夕時雨

まだ聽かされたのはあつたけれども、これだけしか覺えてゐない。

六時頃になつて急に新富座に遊びに往かうといふことになつて、駒形から電車に乘り、京橋で降りて雨の中を歩いて新富座に往つた。樂屋口から入つて階子段を上がると直ぐが喜多村君の部屋。入つて往くと高岡が私達の顏を見て、

「もう少し早くいらつしやりやあ好いのに。今まで皆さんがいらしつたんです」

といふから聽いて見ると、田村壽二郎、長田幹彥、田村西男の三人が、十分ばかり前までゐたのだといふ。そのうち喜多村君が序幕のカフエーの場を濟まして、舞臺から歸つて來たので、いろいろ句樂會の諸君の近狀を聽く。近頃はみんな割合に無事らしい。やがて二幕目が開いて出て往つたので、今度は河合君の部屋に往く。

丁度そこには東儀鐵笛君がゐた。傍で手帳を出して何か書いてゐるのを、誰かと思へば例の鈴木春浦君だつた。何かの話から東儀君が、濁逸協會の先生時代の話をして、

「僕の敎へた生徒の中には、もう幾人も博士になつてゐる」

といふと、河合君は笑ひながら、

「そんなことをいふと、年が知れますよ」

といつて冷やかしてゐた。事實東儀君は、西郷隆盛を知つてゐるさうである。

八時頃新富座を出て、典山を聽きに山村亭に往く。雨は大分ひどくなつて、講釋を聽くのにはいい晩である。客の頭は百ばかりで、丁度典山が上がつてゐて、「荒木又右衞門」の中の一席、河合又五郎が村正の僞刀を打たせるところを演つてゐた。透き通るやうな細い聲、それでずんずん話し込んでいつて、客に息も吐かせない巧味(うまみ)は、典山を措いて外にない。私達は往來に近く緣側のところに座を占めて、何だか世の中を馬鹿にしたやうな心持になつて、古臭い講釋場の空氣に浸つてゐた。

彼はそれから「因幡小僧新助」を演つたが、これもかなり面白かつた。新助が江戸で岡ッ引を斬つて、八王子の笠見重兵衞のところへ逃げて往つてから、またそこにもゐられなくなり、山越しに東海道の吉原の方へ逃げて往くところだつたが、辻堂の中からお藤が番頭を殺すのを見てゐる邊、全く息も吐けないやうな面白さであつた。

日本橋で久保田君に別れ、萬世橋から山の手線の電車で家に歸つた。

それから、「粧蝶集」の中の、「女客」や「玄武朱雀」などを讀んで、寢たのは一時過ぎだつた。

松助の印象

松助は宅悅役者かにかくにこの地獄繪の繪ご
ころを知る

私は或る日の尾上松助の舞臺の上の印象を、次のやうに書いた。

『伊右衞門の家の古壁には、幕の開いた時からもう惡の影がさしてゐる。御家人仕事に傘を張つてゐる伊右衞門の目の凄さ。その時からもう彼の體にも魂にも、怨靈がもの凄く取り憑いてゐる。舞臺をぢつと視つめてゐると、私の目にはここにも髑髏のまぼろしが見える。

蚊遣火の煙が寂しく漂つてゐる夕闇の中に、既に亡靈になつたやうに、影のやうに動いてゐるお岩と、その傍で脅えたやうな顏付でものをいつてゐる宅悦と、もうその時分には私の心は、すつかりこの一枚の怖ろしい地獄繪に魅せられてしまつてゐるが、更に獨吟の唄が悲しく聽え、お岩の前に鏡臺や鐵漿（かね）つけ道具が運ばれて、もの凄い髮梳がはじまる頃には、私の魂は舞臺の上の宅悦とともに慄へてゐる。

拔けた髮の毛を堅く摑んで絞ると、たらたらと衝立の上に滴る血。古ぼけた行燈の仄暗い灯明り。そしてそこには怖ろしいお岩の顏と、戰いてゐる宅悦の顏とがあるが、それもぢつと視つめてゐるうちに、何時の間にか髑髏のまぼろしとなつてしまふ。

おどけた坊主天窓（あたま）の按摩宅悦に扮した松助の顏。驚き怖れる度毎にいよいよお岩のもの凄さが增して來る松助の顏。南北の描いた地獄繪の中で慄へ戰いてゐる松助の顏』

それからまた或る日、別の舞臺の印象を次のやうにも書いた。

『暗い因果物師の家の中には、罪が蜘蛛のやうに巢をくつてゐる。大入の札を貼つた古ぼけた枕屛風の蔭にも、中二階から飛ぶやうな恰好で下りて來る鷄娘の袂の蔭にも、何ともいへないやうな不氣味な暗さが潜んでゐて、ぢつと舞臺を見つめてゐると、そこには罪に呻いてゐる髑髏のまぼろしがありありと見える。

癆を病んで寒さに慄へてゐる老因果物師と、それを介抱してゐる盜賊の息子と、その情婦の美しい遊女と。その三人がまるで蜘蛛の網にかかつたもののやうに、身悶へをして惱み苦しんでゐるのを見てゐると、私はひとりでに涙を誘はれずにはゐられない。しかし私がそんな心持になつてゐるのにも關はらず、舞臺のうへの髑髏のまぼろしは、かたかたと齒の觸れ合ふ音を立てむばかりに、嘲けるやうに笑つてゐる。

あはれな老因果物師に扮した松助の顏。癆を病んで慄へてゐる暗く寂しい松助の顏。罪の巢の眞ん中に傷ついた蜘蛛のやうにのたうち廻つてゐる松助の顏』

そして私は更にもう一度、或る日の別の松助の印象をこんな風に書いた。

『チエホフと尾上松助と。露西亞の喜劇と默阿彌の世話物の中で育つて來た老優と。兎に角何時ぞや帝劇で觀た「犬」といふ芝居は、いろいろの意味で面白かつた。

地主ステパンに扮した松助の顔には、その刻んだやうな口元には、何處か冷笑するやうな皮肉が動いてゐたのを忘れることが出來ない。

「シャンパンだ。シャンパンだ。シャンパンだ」

幕切れに叫んだ、あの松助特有の一種の調子を持つた聲。その聲にも冷笑するやうな皮肉がある』

私はこの三つの印象を通して、既に亡き名優尾上松助を憶ふ。

兩國の秋

うつそみの命寂しきことも知りひとり歩みぬ

兩國の秋

柳家枝太郎といふ落語家が十八番としてゐる唄に、「兩國」といふのがあるが、それは昔の兩國橋附近の繁華な有様を、あるがままに描寫したやうな、にぎやかで面白いものである。かるがゆゑに枝太郎の細長い、目の見當の少し違つた顔が高座に現れると、きつと「兩國」といふ聲がかかる。

昔の江戸時代の兩國は、さういふ唄にも殘つてゐるやうに、殷賑を極めた行樂の巷で、芝居、輕業、見世物、女淨瑠璃、吹矢、楊弓場、講釋の席、髪結床、食べ物屋、水茶屋などが並んでゐたことは、「江戸名所圖會」の挿畫を見ただけで

も、およそそのさまが想像される。そこに描かれてある芥子粒ほどの無數の人間を仔細に見てゐると、その中からは、編笠をかぶつた侍や、槍持奴や、駕籠かきや、その他さまざまの人の姿が私の目にうつつて來る。

しかしそれは百年も「昔」の姿である。今「新撰東京名所圖會」の中の、明治三十二三年頃の「現況」を見ると、僅か三十數年前のことだけれども、「今」とはまるで違つた兩國の姿を、私はそこに見出さなければならない。それにはこんなことが書いてある。

「往時は、觀物、辻講釋、百日芝居と甚だ雜沓の巷なりしも、近年舊態を一掃して、商家櫛比、殷賑の市街とはなりにき。米澤町には五臟圓本舗大木口哲、横山錦柵が生命の親玉をはじめ、賣藥商の看板、四方商舗が和洋酒類罐詰、ならびて勸業場兩國館、落語席の立花家、福本、新柳町に新柳亭あり、晝夜義太夫をきかせ、（中略）金花館といへる勸業場は、兩國館と相對峙し、隣は大黑屋とて新板ものを賣り出す繪草紙店、さて淺草橋最寄りには、消防署派出所の火見櫓高く、

兩國郵便電話支局、いろは第八番の牛豚肉店、栽培せる楊柳數十株點綴する間、

馬車鐵道は二條の鐵路を敷きて絶え間なく往復し、また九段坂、本所緑町通ひの赤馬車は兩國橋際に停車して、本所行或は萬世橋と叫びて客を招き、大川端の橋の左右の袂には、大橋、吾妻橋行の隅田丸發著して、ここ三四町の間、四通八達の街路として極めて賑やかなり。」

五臟圓、勸業場、繪草紙店、火見櫓、いろは、馬車鐵道、赤馬車、隅田丸——さういつた言葉は私の胸に、少年の日を思はせるやうに、なつかしい響きを傳へて來るが、ここの「いろは」で育つた木村莊八君は、一層この感が深いだらうと思ふ。宮戸座に時藏、壽美藏、源之助、菊四郎達が出てゐる時分「沼津」や「切られお富」を見るために、遠く芝の果から淺草まで、鐵道馬車に乘つて通つていつたことを思ふと、今ではまるで夢のやうな氣がする。

が、私には何といつても、この兩國界隈で一番なつかしいのは寄席の立花家である。そこで聞いた落語家の中で、忘れることの出來ないのは、廿年ばかり前に

亡くなつた圓喬で、私がここの高座で「本堂建立」や「五十石」を聽いてから間もなく、その死が傳へられて來たのである。

人の死ぬのはさびしいが、藝人の死ぬのは一層さびしく感じられる。

鐘の音

君がためわがため鳴ると思ふ夜もありし上野
の鐘の音かな

この歌は大正五年五月に新潮社から出版した「東京紅燈集」に載せたものだから、今からおよそ三十年ほど前の舊作である。

この「東京紅燈集」は、その前年の十一月に、同じく新潮社から上梓した「祇園歌集」と姉妹篇をなすものであつて、題名の示す通り東京の煙火の巷のことを

歌つた竹枝風の歌ばかりを集めたものである。裝幀は二つともに竹久夢二君の描いたもので、今になつて見るといろいろ懷しい思ひ出がある。

上野はその頃はまだ三枚橋の傍の廣小路の通りに、引手茶屋か船宿といつたやうな表構への待合があつた時代で、徒士町寄りの通りにまだ雁鍋といふ家があつて、店先の往來から見えるところに、雁が幾羽も吊るしてあつたのを覺えてゐる。まだ落語家の眞打連は抱へ俥で、樂屋入りをしてゐる時代で、よく私は三代目の柳家小さんの俥上の姿を、この廣小路界隈で見掛けたものであつた。久しぶりで「東京紅燈集」を開いて見ると、不忍の池に向つたところにあつた守田寶丹の黒板塀までも歌にしてある。

しかしそれよりも不忍の池といふと直ぐに私が思ひ出すのは、森鷗外先生の小說「雁」の中にあるこのあたりの、神に入つたやうに巧みな描寫である。その中に「並んでゐる家の中で、店を開けて商賣してゐるのは蕎麥屋の蓮玉庵」といふところがあるが、その頃はよく私も食べに入つたものであつた。またこの「雁」

の中には福地櫻癡居士が藝者やお酌をつれて、「吹拔亭」といふ寄席から出て來る一節があるが、バナマ帽の櫻癡居士や、大きな柄の長い提灯を持つた女中などの描寫を讀んでゐると、何だか明治風俗史の一頁を繙してゐるやうな氣がする。

それを見て、

「吾曹先生が來た」

といつて呟く書生の言葉も、如何しても明治の言葉であつて、そこには懷しいその頃の時代の響がある。

今この「雁」の中から時代色のある部分を讀んでゆくと、いろいろの意味で興味がある。松源の塀外に來る聲色使ひが「へい何か一枚御贔屓樣を」といつてやるものは、成田屋の河内山と音羽屋の直侍である。池の傍の高い土塀の外廻に、殺竹が斜めに打ち附けてあるのは、福地さんといふえらい學者、櫻癡居士の家である。吹拔亭へみんなが聽きにゆくのを何かと思へば、圓朝の話や駒之助の義太夫である。押入からブリキ鑵を出して菓子鉢に盛るのを見れば、寶丹の裏の玉子

煎餅で、その傍の横町には如燕の佃煮もあるといふ。そして不忍の池には一面に葦が茂り、蓮の枯れ莖の間には、雁が緩やかに往來してゐる。

しかし私が知つてゐるのは、これよりもずつと後のことで、かういつた明治の時代色は、もうすつかり廢れてゐたが、それでも上野といふと、私に取つて忘れられないのは、あの東叡山の森に谺し、不忍の池にひびいて、町から町へすがすがしい音波を擴げてゆく、あの懷しい鐘の音である。

永井荷風氏は森鷗外先生の居宅觀潮樓上に於てこの鐘聲を聽き、「恰もその時である。一際高く漂ひ來る木犀の匂と共に、上野の鐘聲は殘暑を拂ふ涼しい夕風に吹き送られ、明放した觀潮樓上に唯一人、主人を待つ間の私を驚かしたのである」と、その名隨筆「日和下駄」の中に書いてゐるが、全くこの鐘の音の嫋々たる餘韻は、聽くものの耳に何時までも殘つて、一種言ふべからざる神秘感を與へないでは措かなかつたのである。

馬樂

飄然と高座にのぼる馬樂見てあなわれかもと
うたがふも吾

この馬樂といふのは、一度狂人になつたことのある、先代蝶花樓馬樂のことをいつたものであつて、私はこの奇嬌なる落語家をモデルにして「俳諧亭句樂の死」「狂藝人」、「縛られた句樂」など十數篇の戯曲を書いた。

或る雜誌に連載した「蝶花樓物語」といふのは、この落語家の半生を小說的に書き綴つたものであるが、それは殆ど事實譚であつて、以前或る新聞に載つたことのある「馬樂色懺悔」と題するものによつて書いたのである。それだから私は他の戯曲などでは主人公の名前を、「俳諧亭句樂」といふ假名にして置いたのに

も關はらず、これにはほんとの藝名である「蝶花樓馬樂」といふ名前を用ひた。

私はこの物語の「はしがき」を、

「私がまだ家を外にして遊び歩いてゐる時分、或る年の夏の眞つ盛り、ぢつと座つてゐてもじつとり汗ばんで來るやうな蒸し暑い晩のことだつた。私は吉原の歸りに、その時淺草公園裏の冨士横町に住んでゐた、私の大好きな落語家蝶花樓馬樂を訪ねたことがあつた。お富士樣の境内を通り拔けて、七八段石段を下りると、そこは薄汚い長屋續きの路次になつてゐて、彼の家はその丁度中程のところにあつた」

といつたことで書き出してゐるが、その時馬樂は湯に往つた留守で、入つて直ぐのところに置いてあつた、狸の形の素燒きの手焙りからは、盛んに蚊遣りの煙が立ちのぼつてゐたのを覺えてゐる。

馬樂と狸とはいろいろ因緣があつて、秘藏してゐた狸の置物を、或る人から懇望されたので、狸の婚禮といふ珍無類な催しをして嫁入らせたところが、後にな

つてその狎が離縁になり、

「蟬がなくなく惜しき別れ、大長寺の森の下露も涙に候へども　故ありて離縁申し候。この後は構ひこれなく候」

といふ三行半を持つて去られて來たといふやうな話も、その後やつぱりこの家で、高座のやうな調子で聽かされたのであつた。

高座に於ける馬樂は、彼獨特の飄逸味がそこら一面に漂つてゐて、冒頭をふつてゐる間の何ともいへない味は、誰も眞似られないものがあつた。彼自身は何の氣なしにいつてゐる警句も、聽きやうによつてはその中に、深い人生哲學が說かれてゐるやうに思はれることも屢々あつた。彼が得意のものとしてよく高座にかけたものに「ちきり伊勢屋」といふ人情噺があるが、これでも彼が話してゐるのを聽くと　それはもう一篇の落語ではなく、極めて深遠な運命論を語つてゐるやうに思はれて來るのであつた。

置炬燵

盲目の小せんが發句を案じゐる置炬燵より寂しきはなし

「落語家の小しんの家。下手は格子戸のある玄關で、格子戸の外は直ぐに裏町の人通りの少い往來になつてゐる。玄關の中はタタキになつてゐて、下駄箱、傘置などがあり、上手には鐵の燈籠が吊してある。玄關を上がると二疊の部屋。その正面の障子の向ふは二坪ばかりの狹い庭で、暗い植込の中に南天の實の赤いのがかへつて寂しい。

その部屋と襖を隔てて六疊の座敷。正面に床の間と神棚。床の間には蜀山人の狂歌を書いた懸物が掛かつてゐて、その前にはかなり大きな狸の置物が紅い布團

に載せて置かれてある。神棚の前の方に目の描いてない赤い張子の達磨。座敷の隅に其角堂機一の吉原の句ばかりの色紙を貼りませにした枕屏風。その屏風の上には袖疊みにした唐棧の半纏が掛かつてゐる。

この座敷とは障子を隔てて、上手にもう一間四疊半の茶の間。簞笥、長火鉢、茶棚、チャブ臺など。上手の壁には三味線が一挺掛かつてゐる」

これは私が昔書いた戯曲「小しんと焉馬」の舞臺面であるが、この間取や置物などの樣子は、その頃淺草三好町に住んでゐた柳家小せんの家を、そのまま寫生したものに外ならなかつたのである。

小せんはその頃もう既に足腰が立たず、目も見えなくなつてゐたけれども、それでも性來の强情我慢、釋臺を前に置いてまで高座を勤めてゐたが、機智に富んでゐたところから、「白銅」「ハイカラ」といつたやうな新作落語も手に懸ければ、「居殘り左平次」のやうな古いものにも、白浪五人男の臺詞を新たに工夫して取り入れたりして、何かと聽客の肺腑を抉るやうなことばかり考へてゐた。し

かし小せんのは新作とはいつても、後年三語樓や金語樓のやつてゐたやうなものとは違つて、よく落語といふものの本質を辨へてゐたから、「白銅」にしろ「ハイカラ」にしろ、その創作するところの落語には、市井文學らしい豐かさがあつて、何處か諷刺や諧謔にも味ひのある深さがあつた。

久保田万太郎、岡村柿紅、それに私などが肝煎となつて、「小せん會」といふものを作り、毎月一回何處かの寄席で獨演會をやつてゐたので、その用事やら何やらで、この淺草の三好町の家には、月に幾度となく出掛けて往つた。時には若い落語家に稽古をしてやつてゐるところに往き合はせることもあれば、また時には炬燵にもたれて、何かぢつと考へ込んでゐるところに出會ふこともあつた。

「おや、雪が降り出したやうぢやありませんか」

微かなもの音でも聽きつけたものか、不圖さういつて炬燵から上げた小せんの顔には、見たいものを見ることが出來ない、いたましい心のいろが動いてゐた。

華奢の果

向島にいまは隱れて住む友もいづれは華奢(くわしや)の
果にやはあらぬ

私がみづから「句樂もの」と稱してゐる一群の市井劇は、悉く落語家の生活に取材したものであるが、この「句樂もの」の中で、一番最初に私が書いたのは「俳諧亭句樂の死」で「中央公論」の戲曲號に載つたものであつた。

これは私が麴町三年町の佐藤別宅といふアパートメントにゐた時に書いたもので、句樂は先代の蝶花樓馬樂、小しんはこれも先代の柳家小せん、焉馬は數年前亡くなつた金原亭馬生、柳橋は今も達者な入船亭扇橋、岡田といふ落魄れた旦那は、私がその後「墨水」といふ名前で、幾度も小說や戲曲に書いた鈴木臺水さ

ん、新内の蝶丸は吉原で人氣のあつた吉丸――といつたやうに、それぞれみんなモデルがあるのである。書いた動機は鈴木さんに呼ばれて、その頃淺草の藏前に住んでゐた小せんの家に遊びにゆくと、そこに扇橋や馬生がゐて、いろいろ話を聽いてゐるうちに、不圖胸に浮んで來たのが、この暗い人情劇の舞臺面なのであつた。これは長谷川時雨女史と尾上菊五郎君とによつて企てられた狂言座の試演に、木下杢太郎君の「南蠻寺門前」などと一緒に市村座で上演されたが、その時の配役は、小しんは三津五郎、焉馬は菊五郎、柳橋が菊三郎、新太郎が伊三郎、句樂の妹が菊次郎などであつて、その中で私は三津五郎の小しんと、菊次郎の妹とが傑出してゐたのを覺えてゐる。舞臺稽古の時小しんのモデルである小せんが棧敷に來てゐて、見えない目からぼろぼろ涙をこぼして泣いてゐたのを、今でも時々思ひ出して、何だか罪なことをしたやうな、暗い氣持にさせられることがある。

「句樂の死」の次に書いたのは、「三田文學」に載せた「狂藝人」で、これは

新佃の海水館といふ、島崎藤村先生や小山内薫氏も泊つてゐたことのある宿屋で書いたものである。當時「三田文學」を編輯してゐた永井荷風氏からその時分としては意外に多い原稿料を貰つて、いい氣持になつて、三田から淺草まで久保田万太郎君と二人で文學を論じ芝居を談じながら、夢中で歩いてしまつたのを覺えてゐる。久保田君は今は如何だか知らないけれども、その時分は歩くことが好きで、かういふことも珍しくなかつた。この戯曲が上演されたのは、それから大分經つてからで、林和君と守田勘彌君とがやつてゐた文藝座の試演に、菊池寛君の「敵討以上」などと一緒に、帝國劇場で最初の脚光を浴びたのであつた。勘彌の句樂も、鈴木福子の妹おとしもみんな立派な出來榮で、殊に句樂の氣が狂つてからは、何ともいへない悽慘の氣が舞臺の上に現れてゐた。

それから後の創作の時期は、或は前後するかも知れないが、「小しんと焉馬」は「人間」の二三號に、山本有三君の「生命の冠」と一緒に載せたものなのである。これはちよつとこれに似寄つた事實があつて、それに暗示を得て書いたのだ

が、書いた場所はその時分よく往つてゐた小田原の藤館であつた。これは汐見洋君等のやつてゐた研究座の第一回試演に、有樂座で上演されたが、その時汐見は焉馬を演つて、素人ばなれのした酒脱な藝を見せてゐた。これはその後喜多村研究劇といふ名前で、報知講堂でも演じられたが、その時は喜多村綠郎の小しん、大矢市次郎の焉馬、石川新水の女房、大東鬼城の岡田といふ配役であつた。なほこれはその後帝國劇場の普通興行で上演され、勘彌の小しん、猿之助の焉馬、初瀨浪子の女房の間に交つた松助の岡田が、何處か髮結新三の大屋を思はせるやうな、不思議な旦那ぶりを見せてゐた。

その外私の「句樂もの」の中で、まだ一度も舞臺に上らないものに、「焉馬と句樂」「小しんと焉馬後日譚」「句樂と小しん」「縛られた句樂」などがある。

かうして私はかなり多くの所謂「句樂もの」を書いて來たが、句樂のモデルである蝶花樓馬樂も、小しんのモデルである柳家小せんも、焉馬のモデルである金原亭馬生も、みんなもうこの世の人でなくなつてしまつたと思ふと、轉た感慨に

堪へないものがあつて、いろいろのことが思ひ出される。殊に唯一人最後まで生き殘つてゐた敗殘の旦那岡田のモデルである鈴木臺水さんが、やはりみんなの後を追つて逝いてからは、私は急にかういつた市井の世界から遠ざかつたやうな氣がして、人生の無常を感じないではゐられなかつた。

鈴木臺水さんは衰殘の身を向島三圍神社境内の其角堂に寄せてゐたが、或る日突然路上で倒れ、前後不覺の體を十日ばかり床上に横たへた後、ついにこの世を去つたのである。臺水さんは日本橋の木屋といふ質屋の旦那で、ちよつとした俳句なども作り、

出代りて吉原者となりにけり

馬樂忌や火鉢に立てし駄線香

などといふ、如何にも墨水さんらしい句が殘されてゐる。

林間閑吟

忘られて林のなかにわれ住めば斑猫(はんみやう)さへもおとづれぬかな

小杉放庵君が私のために描いて呉れた繪に「林間閑吟圖」と題するものがある。これは私が相模野の林間都市に住んでゐた時分の姿を描いてくれたもので、水墨のいろのにじんだ櫟林や薄原の蕭條たる風景の中に、少し前こごみになつた兵兒帶姿の村夫子然とした一人物が點出せられてあるが、これは多分林間に閑吟してゐるところの私なのであらう。

私がこの林間に隱棲してゐたのは、私が最も人生の惡夢に惱んでゐた時代であつて、殆ど世間と隔離した、わびしい生活をつづけてゐた。話は大分古くなるが、

今から二三十年ばかり前のこと、武林無想庵君が遮斷生活といふことを頻りに唱へ、比叡山の僧房に引き籠つて、米と鹽だけの生活をしたりしたことがあつたが、私の當時の林間生活も多少それに似通つたところがあつて、いはば孤獨三昧といつたやうな境地ではなかつたかと思ふ。何しろ東京からは小田急の電車で二時間あまりもかかるやうな不便な土地なので、あまり人が訪ねて來ない。起きたい時に起き、眠りたい時に眠り、讀みたい時に讀み、書きたい時に書く。自由で、氣儘で、朗かで、全く遮斷生活位いいものはなかつた。

　庭に來る鳥は、鶯、山鳩、頬白、四十雀、目白、雉子、掛巣など。夜は松林の中で梟が鳴く。その外時々やつて來て、緣側からぬつと首を出すのは、ジユンといふ名の秋田犬。これが多少やくざ性のあるところから、私にひどく馴付いてゐて、歸れといふと悲しさうに唸る。

「人間よりも鳥や犬の方が、どの位可愛いいか知れやしない」と思つたのは春から夏へかけての最初のうちで、秋もだんだん深くなり、阿夫利颪がもの凄じく吹

く頃になると、だんだん人生落莫の思ひが深くなつて來て、爐端で飲む酒の量もめつきりと増し、醉つて昻然とはしてゐるものの夜半不圖目を覺まして、雨のやうに屋根の上に降る落葉の音を聽く時などは、

「おれもやがては相模野の露と消えるのかなあ」

と、柄にもなく心細いことを考へるやうなこともあつた。

　何時だか里見、久米氏等と一緒に雜誌「人間」をやつてゐた連中が集まつた時、何かの話から西洋的東洋的といふことが雜談的に論じられた後で、私が最も東洋的な人間だといふことになつた。さういはれて自ら顧みて見ると、容貌、性格、趣味等悉く東洋的ならざるはなしで、何だかひどく時代遲れのしてゐるやうなひけ目を感じたが、結局その頃の相模野に於ける隱遁生活も、やつぱり私の東洋的な人生觀がさういふ境地に、私の安住の地を見出してくれたのである。

　考へて見ると私の一生の運不運は、すべてこのあまりに東洋的なところにあるやうな氣がする。

私は今でも時々放庵君の「林間閑吟圖」を出して床に掲げ、しづかに相模野時代の回想に耽ることがあるが、さういふ時には今でもなほ、夜更けの屋根に雨のやうに降る落葉の音が、耳にひびくやうに思はれてならないのであつた。

溪鬼莊

やがてここにわれや死ぬると思ふとき猪野々
の里も野ざらしの里

「溪鬼莊」といふ名は、私が自分で選んだものであるが、別に典據があつて附けたものではない。唯その頃はしきりに「死」といふことばかり考へてゐたのと、私の草庵の直ぐ下が深い溪谷になつてゐたのと、この二つが結び付いてかういふ名前が生れたのだと思ふ。しかしその頃の山峽日記を見ると、始めてこの名前を

使つた時のことを次のやうに書いてゐる。これはまだ草庵が出來上らない前、直ぐ隣りの鑛泉宿にゐた時分の日記である。

『今朝もいつもの通り四時頃に目が覺める。外はまだうす暗い曉闇。昨夜の雨で水嵩が增したものか、物部川の瀨音がいつもよりも高い。

厠に下りると、お婆さんは、風呂を焚きつけに往つたと見えて、表の雨戸が開いてゐる。八十二になるのださうだが、山育ちの體の丈夫さ、四五日前も今度私の借りた裏の畑地に、大豆の種を半日がかりで蒔いて吳れた。

中々明るくならないので、床の中で昨日讀んだ露伴の「風流佛」「風流魔」の名文章を思ひかへしながら、二つとも彫刻家の名人氣質を書いてあつたところから「藝」といつたやうなことを考へる。殊に金力と權力とのために、藝術家としての生涯を滅茶々々にされてしまつた、「風流魔」の主人公安堂平七の悲慘な末路は、實に酸鼻の極みである。

五時頃やつと障子が白んで來たので、起き上がつて机に向ふ。何かに溪鬼とい

ふ言葉があつたので、丁度ここにふさはしいと思ひ、まだ家もないのに「溪鬼荘漫筆」と題する隨筆を二三枚書きかけて見たが、如何も面白くないので止めてしまつて、ごろりと横になつたまま默想に耽る。

去年もこの土佐の山中韮生の峽にある猪野々の里で、およそ一月ばかり暮らしたが、今年もまた四月半ばにここに來て、それからいつか三月あまりを、この侘しい鑛泉宿で過してしまつた。乾坤に家なしと思ふと、如何やらこころ細いやうな氣もするが、もともと本來の無一物となることを念願として、野晒しの旅に出た身の上、この位の寂しさは覺悟のまへのことである。上の句は忘れたが、「いかになりゆくわが身なるらん」といふ歌が西行にあつたことが思ひ出される。

入浴、朝飯、いつもの通り。吉村冬彦氏も何かの隨筆で土佐の夕凪のひどいことを書いてをられたが、朝凪もそれに劣らずひどいことがある。今日は妙に雨氣を含んだ曇り空で蒸し暑いことおびただしい。毎朝大栃の方の小學校へ自轉車で通つてゆく小松先生が、例によつて昨日の大阪毎日を抛り込んで往つて吳れた

ので、寢ころびながらそれを讀む。

八時半頃日に一回の郵便が來る。手紙は癩を病んで盲目となり、今では草津の病舍にゐて、唯一の慰めを歌に見出してゐる古谷弘君から、三回も推薦になつたことを感謝して來たものと、この間高知の棧橋に見送つた牧野朱門から無事に歸京したといふ知らせのものと二通だけ。他に木箱の小包が來たので、何だらうと思つて開いて見ると、木村幹君から蝮酒「仙方萬里春」を送つて來たのであつた。なつかしい罎を見ると落莫たる山中遙かに春を生ずるの感。二本のうち一本は高知の伊野部酒麻呂君に贈り、殘りの一本は自分で飮まうと思つて、直ぐに栓を拔いて一杯を傾く。

いささか醉つて午睡數時。目を覺ますと向ふ岸の永瀨部落に住んでゐる山崎翁がやつて來てゐて、閑談およそ二時間あまり。歸りがけに床の間にお懸け下さいといつて置いて行つたのを見ると、筆者不詳の狩野派風の許由の圖である。

許由の圖を眺めながら「仙方萬里春」を傾けてゐたら、おのづから世の煩はし

さも忘れられるだらう。』

酒 麻 呂

あしびきの山こもり居のわがためにうま酒も
て來伊野部酒麻呂（こいのべさかまろ）

昭和六年五月、始めて土佐に遊んだのが機縁となつて、遂に韮生の山峽に小さな草庵を作つて住むやうになつたのは、ひとつにはこの地の風光に心惹かれたためもあるが、それよりも更に大きな原因は、わが任俠の友として伊野部恒吉君を得たことにあるといつていい。

伊野部君は「瀧嵐」といふ銘の酒を釀造してゐる、早稻田大學出身の少壯實業家であつて、私は最初土佐に遊んだ時に、はじめて知己になつたのであるが、そ

の後ともに佐渡越後の方面に旅行をしたり、土佐再遊を試みたりしてゐるうちには、肉親以上の友情を感ずるやうになつてしまつて、韮生の山峽に作つた草庵も、同君の酒藏の裏手にあつた家を取り壞すといふので、その古材木を貰ひ受けて建てたものなのであつた。

性磊落にして邊幅を飾らず、思ふところは斷じて行ふといつたやうな直情徑行の一面には、思ひやりの深い情味に富んだところがあつて、俠氣が生んださまざまの逸話も、私が聞いただけでもかなり多い。本業は酒の釀造だつたけれども、趣味が廣く實行力に富んでゐたので、政治、文學、美術等各方面にも寄與するところが大きく、「高知の伊野部」といへば殆ど知らないものがない位、異色のある人物となつてゐた。

天衣無縫のやうでゐながら細心緻密、放縱不羈のやうに見えてゐて、底には嚴然たるところがあるといつたやうな、ちよつと端倪すべからざる風格を備へてゐたので、大抵最初會つたものは一驚を吃するが、しかしだんだん交りが深くなつ

てゆくにつれて、津々として盡きざる情味が感ぜられて來て、純情神のごときものを覺えるやうになつて來る。

私が溪鬼莊で山峽生活をつづけてゐる間にも、絶えず「瀧嵐」を送つて來てくれたし、自分も十里の山路を遠しとしないで、大抵一月に一度位は、誰か伴をつくつては慰めのためにやつて來てくれた。私は戯れに「酒麻呂」と呼んでゐたが、この海南の友をうたつた歌は、まだこの外にも幾首かある。思ひ出すままに書きならべて見よう。

はたた神いきどほろしく鳴り出でぬいまこそ酌まめ酒麻呂の酒

いきどほろしき心をもちて酒麻呂のつくれる酒は酌むべかりけり

ここはしも猪野々山里訪ひ來とも伊野部酒麻呂妹な欲りそね

夜ごとに酒麻呂の酒酌みながら百足の宿に安居すわれは

かにかくに友はうれしも別れ酒伊野部酒麻呂酌めとも來ぬ

亡友

寂しければ死にたる友の誰彼のことを思ひて
目裏熱しも

私は昭和九年、土佐の山峽にある溪鬼莊に落着くまで、殆ど旅でばかり過して來た。それだからもうすつかり異郷の風土にも馴れてしまつて、遠い他國で年を迎へるといふことも、それほど寂しいとは思つてゐないが、それでも師走の空を見ると、あわただしい東京の歳晩風景が目に浮んで來て、日頃は忘れてゐた誰彼のことが、いとど懷しく思ひ出される。

物心を覺えてから卅有餘年、不圖したことから述作を業とし、文筆で口を糊するやうになつてからもうかなり長く、その間爾汝の交をして來た友もかなり多い。

それも今思ひ出して見ると、何の奇もなく年を送り年を迎へてゐた間に、見るところの風物は年々形を改めないのに、人の身の上には推移が激しく、友の多くは既に逝いて、今この世に殘つてゐるものでも、私と同じ位の年輩のものは、誰しもみんな老愁の色が著しい。

私は長年つゞけてゐた歌行脚をやめて、すつかり籠居をするやうになつてから數年になるが、それでも時折障子を開けて仰いで見る師走の空には、何だか諸行無常とか、寂滅爲樂とかいふやうな文字が書いてあるやうに思はれて、いつも歳晩になると胸に起る回顧の情には變りがない。

殊にこの數年、その急逝の日が十二月の末であつたためか、師走の聲を聽くと、亡き小山内薫氏のことが思はれてならないのである。

小山内氏を悼む文章は、これまで幾度も書いたから、今改めて哀傷の情を繰返して述べまい。それよりも古行李の底から小山内氏から私宛に送られた古い繪葉書が二三葉出て來たから、これについて二三感想を述べることにしよう。

一枚は赤い惡魔の姿の描いてある繪葉書で「倫敦にて、薫」としてある。第一回の洋行の時に英吉利から出したものであらう。文句は「近頃どうしていらつしやいます。少し沈默のやうですねえ。どうも日本のやうに劇界が長足の進歩をする所では沈默の外ありますまい。併し私が歸つたら大いに同盟してさかんに戰爭をしようぢやありませんか。ここの婦人參政運動を見て私は恥ぢました」とあつて意氣軒昂たるものがある。私はこの葉書を見て更に、小山内氏に對して恥ぢざるを得ない。

他の一枚は歸朝後赤坂田町の寓居から鎌倉の私宛に送られたもので、テエムス河畔の寫眞のうへに「倫敦の追憶よ、テエムスの半日よ」と詠歎的な句が書かれてある。

せめて遠い他國の空、これ等の葉書を眺めながら、亡き友の在りし日の追憶に耽つてゐると、先づ最初私の目に浮んで來たのは、はじめて淺草の瓦町を訪れた時の光景だつた。

それは秋の日の午前のことで、始めて通された二階の書齋には、床の間まで一杯本が並べられ、部屋の隅には白地に大きく毛拔を描いた小田原提灯がぶら下がつてゐたが、それは市川左團次君が歌舞伎十八番の「毛拔」の復活上演を試みた時、連中に土産として出したものなのであつた。私が入つて行くと、そこには一人の學生のやうな身裝をした青年が座つてゐたが、それは當時の市川團子、後の猿之助君だといふことが紹介されて分つた。

私達は暫くそこで、芝居や戯曲の話をした後、近所の鳥屋で午飯を食つて別れたのだが、私達の交遊はそれから急に深くなつて、毎日のやうに「大川端」のあたりをさまよひ歩いた。

如何してだか小山內氏といふと、毛拔のついた提灯が、先づ私の目に浮んで來る。

病中口占

熱すこしありて春ゆく日は暮れぬうつうつと
してものを思はむ

昭和十年五月、私は久しぶりに土佐から上京して、麴町紀尾井町にあつた妹の家の離れ屋に、流離に疲れた身を横たへてゐた。ずつと微熱がつづいてゐたので、いささか神經を昂らせて、家に閉ぢこもつたままラジオばかり聞いて暮らした。

その前々年の夏、私は小杉放庵君と越後から佐渡の方へ旅をした時、その土地土地での民謡を聽いて、放庵君から勸められるままに「日本詩經」を編んで見ようかと思つたことがある。それだけに私は民謡とか俚謠とかに愛着を持つてゐるので、今度も六日の佐渡越後の俚謠および八日の松江の民謡など興味深く聽いた。

兩津甚句、三階節、佐渡おけさ等何れも曾遊の地の唄であるだけに、今更ながら流離の旅のわびしさなどが思ひ出されて、暗憺たる日本海の海の色がほのかに目に浮んで來るやうな氣がした。松江の唄は佐渡越後のものとは違つて、ひどく古風でおほまかなもの。伯耆くどき「名和勤船上嵐」などは「唄ひますればよう、お聽き下さいよう、トコドッコイショ」といふやうな囃しがあつたりして、悠々として南山を見てゐるやうな快さが感じられた。

それから又、これは俚謠といつては如何かと思ふが、五日の午頃に滿洲のハルビンから中繼放送された西洋音樂の中に「ジプシー・ローマンス」といふ獨唱があつたのを聽いて、言葉を解することが出來ないながらも、堪へられないやうな哀愁が感じられてならなかつた。

これはおそらくは常に私の胸に宿つてゐる流離の思ひが、一脈ジプシーのそれと相通ずるものがあるためではないだらうか。

偖今度かうした偶然の機會から、久しぶりでラジオを聽いて見ると、私も既に

老境に入つたせゐか、何よりも箏とか尺八とかいふ純日本的な音樂に、心を惹かれてゐるといふことがはつきり分つた。さういつた音樂の持つてゐる傳統的な音調には、やつぱり日本民族の胸の血潮に、端的にひびいて來るものがあつて、到底西洋音樂からは感じられないやうな、深い郷土的な親しみがある。

かうして箏の「千鳥の曲」や尺八の「若葉」に懷しみを覺えるやうな自分の姿を、今ここに見出さうとは思はなかつただけに、私は不圖日が暮れかけてゐるのに氣付いたやうな嚴かな心持を、しみじみ感じないではゐられなかつた。

さういつた心持で、この一週間聽いたラジオの中で　何が最も心に殘つてゐるだらうかと考へて見ると、結局懷しく思ひ出されるのは、小鳥の朝の駒鳥、瑠璃鳥、金糸雀の啼き聲、カトリックの禮拜の鐘のひびき、それに相撲の觸太鼓の音。

地獄草紙

もののの本何かは知らず讀むほどに涙落ち來ぬ
　氣やは衰ふ

これは昭和十年の秋につくつた「病中口占」中の一首である。

その頃私は久しぶりで土佐から東京へ出て來てゐたが、足の水蟲をすつかり惡くしてしまつたために、到頭歩くことも出來なくなり、駒込千駄木町の木下病院で、毎日鬱陶しい日ばかりを送つてゐた。

ところがこの病院の木下國手は、演劇や美術の愛好家で、自分でも素人ばなれの繪を描くところから、その所藏にかかる「繪卷物集成」を借覽してゐるうちに、圖らずも「地獄草紙」「病草紙」「餓鬼草紙」などと云ふ古い繪卷を、寫眞版では

あるが見ることが出來た。芥川君の「地獄變」を脚色した直ぐ後だつたので「地獄草紙」その他「病草紙」「餓鬼草紙」と云つたやうな、同じ系統に屬するこれ等の繪卷には、殊に心を惹かれるものがあつた。

解說によると、世に知られてゐる「地獄草紙」は、安住院本、原富太郎本、益田孝本の外に、米國ボストン博物館所藏のものがあるだけださうであるが、その各々が地獄の名を異にし、荒唐無稽に感ぜられる位千差萬別の畫面であるところが、かへつてかう云つた草紙らしくつて面白い。私は「地獄變」の中で原作にない地獄問答を、繪師良秀と橫川の僧都との間にさせたが、若し脚色以前にこの繪卷を見てゐたならば、恐らくはそれはもつと形を變へたものになつてゐたかも知れない。しかし畫光長、詞寂蓮と傳へられてゐる、これ等數卷の「地獄草紙」は、光長と云ふ人が如何なる繪師かは知らないけれども、畫品低く、毫技劣つたものであつて、見てゐて唯醜怪な不氣味さを感じさせるだけのものであるから、むしろ見なかつた方が私としては、幸ひだつたとも思はれるのである。

私はこれを見てゐるうちに、文字を以て表現する、現代の「地獄草紙」を書いて見たいと云ふ欲望が、かなり切に、胸を壓するがごとくに起つて來た。解説の中の一節に「しかもそれがまたいづれも酒の罪による所が最も多い。例へば持戒の人に酒を飲ましめたり」云々としてあるから、勿論私も地獄をさまよふ罪人として書くが、猶私以外にもいろいろと知るものの姿を、阿鼻、焦熱、叫喚などの地獄のあたり、牛頭馬頭の獄卒どもに追はるる群の中に、書き加へなければならないであらう。芥川君も「侏儒の言葉」の中で、「人生は地獄よりも地獄的である」と云つてゐるが、全くつくづくと考へて見れば、娑婆苦の中にはむしろ地獄苦にまさるものがあるではないか。

病中籠居の身の鬱々として、そんな事を考へてゐると、不圖私の心に浮んで來たのは、泉鏡花先生が愛讀されてゐたといふ李長吉の詩である。それは凄氣を帶びた幽鬼曲のやうなものであつて、「漆灰骨未丹水砂、凄々古血生銅花、白翎金簳雨中盡、直餘三脊殘狼牙」といふ詩の如きは、まだ私の念頭にある。

土佐閑居

夜は深し風もあらぬにおのづから柿の落つる音を聽きてもの思ふ

私が土佐の韮生の山峡にあつた溪鬼莊を棄てて、高知の町はづれにある築屋敷に居を移したのは、昭和十二年の十月のことだつた。そこは鏡川の川岸の堤防にあたるところだつたから、直ぐ前の桑畑を隔てて、清冽な水の流れてゐる河の面を見ることが出來た。筆山や鷲尾山もその向ふに、何處か京洛の山々を思はせるやうな閑味のある山容を列ねてゐた。家は古びて建附の惡い、絶えず隙間風が吹き入つて來るやうな陋屋だつたけれども、ここらは由緒ある武家屋敷の跡だつたと言はれてゐるだけに、何處か落着いたところがあつて、石榴、柿、梅、芙蓉、

杉、南天、蘇鐵など、庭樹の數も少くなかつた。

私はこの築屋敷の家で、丁度一年の間暮らしたのだが、わびしいけれども靜かに落着いたその間の生活は、それまでの私のあわただしかつた、人生流離の旅の塵を拂ひ落すのに、どの位役立つたか知れなかつた。その頃の日記には、こんなことが書いてある。

『×月×日。

柿の落ちる音で目を覺ますと、もう電燈が消えてゐる。いつもの通り門の中に投げ込まれてある新聞を取りにゆき、それを携へて上圊。

出て來て庭を見ると、簑蟲が目に見えるか見えない位の糸を傳つて極めて徐々と、樹の枝の方へのぼらうとしてゐる。

暫くそれを眺めてから机のまへに座つて「短歌研究」の歌の選。この二三ヶ月まるで歌が出來ないので、かう云つた應募の詠草を見てゐても何となく壓迫されるやうに感じられて心が苛立つ。

四五十枚の葉書に目を通しただけで選を止め、ぼんやり玻璃戸越しに庭を眺める。砂利だらけの庭には、色の褪せた紅芙蓉の花や潰れた柿の實が落ちてゐるが、今朝は蜥蜴の姿が見えない。

朝食後例によつて、座敷に午睡用の小布團を敷き、寢ながら昨夜來たままになつてゐた都と讀賣の二新聞を讀む。

十時頃思ひがけない京都の田村敬男君が見える。田村君は私の歌集「人間經」や隨筆集「わびずみの記」を出版して呉れた政經書院の經營者で、少年時代私の叔父のところにゐた舊知である。全く豫期しなかつた訪客なので、友あり遠方より來ると云ふ感が深く、午頃までいろいろ話す。

午後はまた厭々ながら歌の選。

×月×日。

朝八時頃から田村君と日新館の松村氏と三人、舊棧橋のところから舟に乘つて釣に出掛ける。横濱の沖まで舟を駛らせ、錨を投げ込んで釣支度、笠をかぶり、

手甲を穿め、形だけは釣客らしくなつたものの全然魚は鈎にかからず。結局種崎に舟を着けてもらひ、一人釣をあきらめて歸る。

歸宅後草臥れて午睡。目を覺まして見ると、北支に從軍してゐる歌人巡査伍賀泰君から手紙が來てゐて、中にこんな歌が書いてある。

からくにの秋立つらしも夜あかりのこの草むらに鳴く蟲の聲

夜床に入らうとしてゐるところへ、徳川夢聲君から迎へが來て得月花壇へゆく。夢聲君とは四五年ぶり。お互に鬢髪白きを加へたるを歎ず。久保田万太郎君に寄せ書をしたが、夢聲君がその晩の寫生句「誘蛾燈ネオンにつづきまたたける」と書いたのを覺えてゐるだけで、後のことは夢茫々』

以上私の「土佐日記」の斷片である。

冬日讀書

冬日さす障子のかげに仰寢して人の傳など讀むは樂しも

私の高知の街はづれに於ける生活は、全く無爲そのものといつてもよかつた。何だか人生の幕間といつたやうな、極めて空虚な時を過してゐたので、別に机に向つて仕事をしようとするやうな氣も起らず、毎日机邊に仰臥して、手の觸れるままにそこらの書物を亂讀してはその日その日を送つてゐた。さういふ時の讀み物としては、何と云つても私には、古今東西誰によらず、人物を如實に描き出した、傳記の類が興味が深い。

やつぱり土佐の山峽にある、溪鬼莊に籠居してゐた時代にも、幾度も繰り返し

てナポレオンの傳記を讀み、この英雄の悲慘な末路にひどく心を動かされたものだつたが、どうも私の傳記類に對する興味は、それ以來急に深まつたらしく、古本屋などの店頭に立つても、無意識のうちに私は、さう云つた書物を涉獵してゐる。

それで私が手の觸れるままに亂讀してゐるのも、結局多くは傳記類であるが、近頃讀んださう云ふ書物の中では、何と云つても森鷗外先生の「伊澤蘭軒」が面白かつた。これは今度始めて讀んだ譯ではなく、新聞に連載された時も、單行本として上梓された時も、再三耽讀したものであるが、今非常時歲晚の忙しい中にあつて、殆ど何等の波瀾もなく、平和にその生涯を終つた、一儒者の一生を考へると、何となく私には安心立命と云つたやうな、諦悟の情が感ぜられる。

しかし鷗外先生は、この蘭軒の傳を書くに當つて、敢然として一つの信念のもとに筆を執られたものらしく、平板な學究生活を敍述してゐる間にも、時々火のやうな熱情を藏してゐる言葉が見出される。

鷗外先生は蘭軒の詩の中の「公宴ニ陪セズ朝ニ坐セズ」と云ふ一句について、かの鐵血宰相ビスマルクが一切の燕席に列せずして、國政の任を全うしたと同じやうに、蘭軒も亦同一の自由を許されることによつて、校讐の業を專らにすることを得たと述べた後で、一言かう云ふ感想を付け加へてゐられる。

「人は或は此言を聞いて、比擬の當らざるを嗤ふであらう。しかし新邦の興隆を謀るのも人間の一事業である。古典の保存を謀るのも亦人間の一事業である。ホオヘンツオルレルン家の名相に同情するも、阿部家の躄儒に同情するも、固よりわたくしの自由である」

私は今度蘭軒傳を讀むに當つて、この言葉位痛快に感じたものはない。鷗外先生の敢然たる信念と氣魄とが、今猶この數行の文字のうへに、烈々として燃え上つてゐるではないか。

私はこれを讀んで新たに一つの信念を得た。

蜥蜴

あれ庭に蜥蜴はしるを見てありぬ怒りに似た
る思ひ持ちつつ

私は數年前歌行脚の途次徳島に往き、そこの街はづれに隱棲して世を終つた外交官あがりの、葡萄牙の詩人モラヱスの舊宅を訪れたが、その時彼の家主だつた老人から、モラヱスが樹木を愛し蟲を愛して、葉が茂つても伐ることを許さず、蜂に螫されても殺すことを敢てしなかつたと云ふことを聽いて、甚だ味ひの深い話だと思つた。

私はその話に感銘したわけではないが、格別愛すると云ふほどではないけれども、近來蟲と云ふものに對して、以前のやうに嫌惡の情を感じないばかりでなく、

その中の或ものには親しみをさへ覺えるやうになつた。

その頃私の家は、土佐の高知の街に沿うて流れてゐる鏡川の岸近くにあつて、前は積土の上に作られた桑畑、後は直ぐに堤防になつてゐるので、庭にも家の中にも蟲が多い。庭は十坪ばかりの砂利だらけの荒庭で、柿、柘榴、蜜柑、南天、榎までが植わつてゐるが、いつも蜥蜴が三四匹は、その木の幹や石の上を這ひ廻つてゐて、嚙み合つたり交尾んだりしてゐるのを見ることもある。最初はあの青黑く光つた膚のいろが、見るのも不氣味に感じられたが、毎日々々見てゐるうちには、だんだん可愛らしくなつて來て、蛇に覘はれてゐるのを見た時などは、思はずはつと息を詰めて胸の動悸の高まるのを覺えた。

わが家の蟲で、次に擧げなければならないものは蜘蛛であらう。ここから十里ほど隔てた山間にある、私の小さな草廬溪鬼莊には百足が多く、これにもしまひには慣れてしまつたが、今住んでゐるこの家にゐる蜘蛛は、少くとも私の知つてゐるかぎり、かなり大きいのが三匹ゐる。それは大抵、便所の天井、臺所の壁、

茶の間の襖と云つたやうに、きまつた居場所にへばり付いてゐて、じつと夜中、私の家の番をしてゐてくれてゐるのである。蜥蜴や蜘蛛といへば、ともに人から嫌はれる蟲だが、一度親しみを感じてみると、さう厭はしいものとも思へない。

私はその頃まだ盛んに酒を飲んでゐたので、夏は夕方日が翳つて來るのを待ちかねたやうにして、縁側に出て趺座をかきながら、井戸水に冷やして置いた焼酎を飲んだ。

芙蓉の花の散りかけてゐる庭隅を見ると、そこには青黒く光つた背の蜥蜴が二三匹這ひ廻つてゐたが、それを見ながら飲む焼酎の味は、一層強烈な南國の匂ひがするやうに感じられて、ひとりでに心の昂ぶつて來るやうな豪快さを覺えた。世をわび住みの身のうへだつたけれども、胸にたまつた鬱勃の氣は、今さら如何することも出來なくつて、ともすれば憤りに似た激しい感情が、心の底から湧き上がつて來た。それは怒りとも悲しみとも、はつきり分らないやうな感情であつて、何か大きな聲で怒鳴るか、或ひは何かそこらにあつたものを敲き付けるかし

なければ、到底心が和みさうにもなかつた。

私が焼酎を飲みながらぢつと唇を噛んでゐると、一匹の蜥蜴はなぐさめ顔に、ちよろちよろと縁に近づいて來た。

蜻蛉

蜻蛉羽の微かふるふを見てゐたり遠雷の鳴る
を聽きつつ

私の高知の築屋敷の家には、蜥蜴や蜘蛛のやうに、人から嫌はれる蟲ばかりでなく、誰からも愛される蝶、蜻蛉、蟬なぞも、やつぱり毎日のやうに訪れてくれ、中にはここをその「終の栖」としてゐるのではないかと思はれるものもあるのである。

それは何かといふと一匹の可憐なかげらふ蜻蛉であつて、私が机を据ゑてゐるところから、つい二三間先の庭の隅、低い塀の傍に植わつてゐる三尺ばかりの芙蓉の木の根もとのところの石のうへに、いつもぢつと留まつてゐて、偶に思ひ出したやうに、鴉羽いろの細い羽を擴げたかと思ふと、直ぐにまた、脅えたやうに、もと通りそれを合はせてしまふ。見てゐると何だかいたいたしく、それでゐて何處か艶めかしい。今朝は芙蓉にうすくれなゐの花が一輪、ぽつかりと明るく咲いてゐるので、ひとしほこのかげらふ蜻蛉の影がうすく、やがては死ぬる身かとあはれになる。

蝶はこの春ごろには、このかげらふ蜻蛉と同じやうに、眞つ黒な羽をした大きなのが、いつも庭先の柘榴の樹のあたりを飛んでゐたが、それも何時の間にか見えなくなり、濃い朱のいろをした柘榴の花も、氣の付かないうちに散り盡くしてしまつた。このごろこの庭を訪れて來る蝶は、黒地に黄や青の縞模樣のあるもので、柑子の繁つた葉のあひだから現れて來たかと思ふと、直きに風に吹かれて飛

んで往つてしまふ。が、二三日前不圖庭の乾いた地面のうへを、その中の一羽が衰へはてた姿で、飛びあがるほどの氣力もなく、のろのろ動いてゐるのを見て、やつぱりこれもそのうちに、死ぬのかと思ふとあはれになつて、しばらく目を離すことが出來なかつた。

蟬は晝間もよく庭の柿の木なぞに來て鳴くが、夜緣先に食卓を置き、糖尿で禁せられてゐる酒の代り、燒酎をひとりで飲んでゐると、電燈をめがけて飛び込んで來るのは、金ぶんぶんよりも蟬が多い。そつちへ往つたこつちへ往つたと一騒ぎあつてから、やつとつかまへた蟬を庭の闇に抛つてから、さてまた緣に腰を据ゑて飲む燒酎の味は、世を棄ててこそ知るうまさであらう。

さういふ時に、私の胸に思ひ出されるのは「喪に居る者は悲をあるじとなし、酒を飲むものは樂を主とす、愁に住する者は愁を主とし、徒然に住する者は徒然を主とす。淋しさなくばうからましと、西上人の詠侍るは、さびしさを主なるべし」といふ芭蕉の言葉である。

蜥蜴に親しみ、蜘蛛を喜び、蜻蛉を憐れみ、蝶を悲しむのも、愁に住し、徒然を主としてゐるやうなわび住みなればこそであつて、芭蕉は酒を飲むものは樂を主とすといつてゐるが、鬱勃の氣を遣らむがために、燒酎を煽つてゐるのでは、如何も樂を主とすることにはなりさうもない。

こんな日を送つてゐるうちに私には「淋しさなくばうらまし」といふ西行の言葉もいくらか分るやうになつて來た。

猪野々行

山に往かばまたもの思ふことあらむ往かな爐
酒も待ちてあるべし

山田を十時に出た省營自動車は、町を出はづれてから七八町往くと、談議所といふところから右折して橋を渡り、それからはずつと物部川の南岸に沿うて駛つてゆく。橋を渡つて直ぐの神母(いげ)の木は、彌生式の土器があるので有名な龍河洞へ行く道にあたり、街らしい家並がつづいてゐるが、それから先は杉林や竹藪ばかりの山道で、駛つてゆくに從つて、川岸の斷崖はだんだん高く、窓から見る溪流はだんだん遙かに下の方になつて往つた。

考へて見ると私が始めて韮生の山峽を訪れたのは、昭和八年七月のことだつたから、それからもう早くも數年の歳月が流れてゐるわけである。この間私の身邊に起つたいろいろの變化や、世の中の激しい推移などを考へると、今ではすべてを諦めて、過ぎ去つたことは、なるべく思ひ出すまいとしてゐる私であるけれども、やつぱりさまざまの感慨が、この山峽の風物を見ることによつて呼び起される。

猪野々口で自動車を降りてから、うつかりしてゐると足が滑りさうになるやうな急な坂路を一町半ほど下り、それから神賀橋といふ大きな吊橋を渡るのだが、

渡り切つた橋の袂のところには、まだ橋の架からなかつた時分からある「見渡し地藏」といふ石地藏が、色の褪せた赤い涎掛けを懸けた姿で、先づ私を迎へて呉れた。

それにもうひとつ愉しかつたのは、橋を渡つたところにある一軒家で、そこには七十あまりのお婆さんと美しい孫娘とが住んでゐたが、以前はここにあつた渡船の番などをしてゐたところから、ひとりでに私も懇意になつて、ここを通る度毎に、聲位は懸けてゐたのだつた。それでその日も如何してゐるかと思つて覗いて見ると、俯向いて針仕事をしてゐる娘の姿が見えて、丁度そこへ婆さんも山から戻つて來た。話してゐると猪野々で暮してゐた二三年間のことが懷しく思ひ出された。

そこからはまた向ふ岸よりも、更に險しい石高路で、暫く往くと小高いところにもう一軒、竹細工を生業とする家があつた。ここにも二十ばかりの娘を頭に、三人ほどの娘があつて、よく山羊を引つぱつて歩いてゐるのを見懸けたが、今日

は人の住んでゐるやうな氣配もなく、この前來た時には、息子が水兵に出てゐると見えて、錨の附いた旗が藁葺屋根の上に飜つてゐたのに、今日はそれすら見えなかつた。

更にまた坂を登つて往くと、小さな瀑の落ちてゐるところがあつて、丁度それを見るのにいいやうな位置の樹蔭に、以前よく腰掛けたことのある石があつた。今日もそこに腰を下ろして、汗など拭いて休んでゐると、耳に入つて來るものは、媚びるやうな山羊の聲や水車小屋からひびいて來る單調極まる杵の音や、すべて以前聽き覺えのある懷しいもの音ばかりである。

この坂を登りきつたところが猪野々部落で、そのはづれの斷崖の上に、私がはじめてこの山峽を訪れた時に泊つた鑛泉宿があり、そこから一段低くなつた崖つぷちに、住み棄てたままになつてゐる私の草庵溪鬼莊がある。

爐端

われはもよ盲ひならねど爐のうへの自在の竹
に手觸り飽かなく

私の草廬溪鬼莊は、思つたよりも荒れ果ててゐず、壁の落ちたところが二三個所あるだけで、屋根も誰か繕つてくれたものと見えて、ところどころ新しい藁葺の痕が目立つてゐた。雨戸を開けると久しく閉め切つてあつたので、黴臭い匂ひが漂つてゐたが、それも溪谷の方から吹き上げて來る河風のために、直ぐにさつぱりと吹き拂はれてしまつた。

まだセルでも坂路を登つて來ると汗ばむ位暑く、火が戀しい時分ではなかつたけれども、それでも私はここに來ると、何よりも懷しいのは六疊の間の眞ん中の

ところに、半疊敷ほどの大きさに切つた圍爐裏である。見ると釜は何處かにしまひ込まれたと見えて、煤けた自在の竹が下がつてゐるばかり、爐の灰も冷たくかたまつてゐたけれども、それでも私はこの部屋に入ると、先づこの爐端に座らずにはゐられなかつた。

私はこの爐端で僅か二冬を過しただけだつたけれども、それでもここに座つて見ると、ここで爐酒を酌み交したいろいろの人の面影が、まるで煤けた壁に貼り付けられた昔の錦繪でも見るやうに、おぼろげながらも目に浮んで來る。それもその後二三年の間に、みんなそれぞれ身の上に、さまざまの移り變りがあるだけに、私はこの爐端にも人生の波が、來つてはまた去つて往つたことをはつきりと感じて、無心にここに座つてゐることが出來なかつたのである。

それで今日私がここに座つて、先づその面影を目に浮べたのは、誰だつたかといふと、それはその前年の春に爭議の犧牲となつて、自らその命を絕つた土佐商船の專務小林民吉氏の溫顏であつた。同氏は熱心な佛敎の信者で、毎朝娘達にも

觀音經を誦ませるといふやうな人物であつただけに、傷ましい死を遂げた心持も、大體分るやうな氣がするけれども、それにしても私は旅先において、同氏の訃報を聽いた時位、人生の無常を感じたことはなかつたのである。

この草廬の爐邊の客で、この世を去つたのは小林氏一人だけれども、そのほかの人達でも、それぞれみんなその身の上には、かなり激しい移り變りがあつて、今久しぶりにこの爐端に座つて見ると、人生の事、明日をも知ることが出來ぬといつた感がいとど深い。

火のない爐端に座つて、こんなことを考へてゐると、そこはかとなく昔の酒のにほひが漂つて來るやうな氣がして、私は肌寒いやうな寂しさを感じた。私は一晩泊つてから高知へ歸らうと思つたけれども、私の飲み相手であつた鑛泉宿の主人は、今丁度出征中で、後には老人や女子供が殘つてゐるだけなので、今夜はここに泊るのを止めて、久しぶりで大栃まで歩いて往き、そこから省營自動車に乘らうと思つて、まだ暑いとは思つたけれども、午後三時頃に猪野々を發つた。

道はやつぱり物部川の溪谷にのぞんだ斷崖の上にあつて、三四町往くと近頃出來たらしい、以前は見懸けなかつた炭燒小屋があつたが、それから大栃まではもう殆ど人家がなく、牛を曳いた男が山から下つて來るのに出會つただけで、時時蛇や蜥蜴に脅かされた位のものであつた。

猪野々を出た時には、まだかなり強かつた日射も、大栃の近くになつた頃はもうすつかり光が淡れ、涼しい風も吹き出して來たので、足はかなり重くなつてゐたけれども、久しぶりの山歩きの快さに、さつき爐端で感じた寂しさなどは、何時忘れるともなく忘れてしまつた。

私はそれから一時間の後には、物部川の溪谷に臨んだ斷崖の上を、迂餘曲折しながら駛つてゆく、省營バスの中にあつた。

觀潮樓

そのむかし觀潮樓の床に見し雷の一字を忘れかねつも

觀潮樓といふのは、根津權現の方から團子阪を登り切らうとする崖の上にあつた、森鷗外先生の居邸の名であつて、そこの二階からは市中の屋根を越して遙かに遠く、東京灣内の碧潮が見られた。私がこの觀潮樓を屢々訪れるやうになつたのは、明治四十年第一次「昴」を出すやうになつてからのことであつて、この雜誌がすべて鷗外先生の監修の下にあつたために、毎月幾度となく編輯者である石川啄木、平野萬里、それに私の三人は、先生の御指示を受けなければならなかつたのであつた。それにまたその頃には、後に「觀潮樓歌會」と稱されたものが、

毎月一回催されてゐたので、その時にもまた先生の溫容に接する機會があつた。

この「觀潮樓歌會」のことについては「短歌文學全集」に收められてゐる伊藤左千夫氏の「消息」と題する一文が、よくその會の性質や情勢を傳へてゐるから、ここにそれを引くことにする。

「森鷗外氏の發意になれる一種の歌會が、この三月より同氏宅に開かれ、爾來月一回づつ相催し居り候。それは主人及び上田敏、佐々木信綱、與謝野鐵幹、平野萬里の諸氏と、小生との會合に候。文學に對する趣味と見解と、頗る相異れる人々をあつめ候。此の會合が如何なる結果を産むべきかは今日のところ豫測し難く候。時には談笑の間に友誼的硏究を共にし、或時は又颯然衣を拂つて筆戰相見ゆるも愉快なるべく候。要は私情を捨てて公明に從ひ、眞個斯道に盡す念よりせば、交遊固より可なり、敵對毫も不可なしと存じ候」

この「消息」で大體分るやうに、鷗外先生の意圖はこれによつて、新しい日本の眞個の歌を樹立することにあつたらしい。會するものは左千夫氏が擧げた人々

の外に、石川啄木、北原白秋、齋藤茂吉、古泉千樫、それに上田敏、賀古鶴所、木下杢太郎なども、時には來り加はることもあつた。この歌會は何時までつづいたかはつきり記憶をしてゐないが、そのうち石川啄木のやうに「歌なんかつまらない」といふものが出來て、自然消滅といつたやうなことになつてしまつた。

私がこの觀潮樓で、最も記憶に殘つてゐるのは、いつも床の間に懸けてあつた雷といふ字をたつた一字、石摺にした大幅である。これは永井荷風氏にも強い印象を與へたと見えて「日和下駄」の中の「崖」といふ章に、「私は取次の人に案内されるまま、暫くの間唯一人この觀潮樓の上に取殘された。樓はたしか八疊に六疊の二間かと記憶してゐる。一間の床には何かいはれの有るらしい雷といふ一字を石摺にした大幅がかけてあつて、その下には古い支那の陶器と想像せられる大きな六角の花瓶が、花一輪さしてないために、却つてこの上もなく嚴格に又冷靜に見えた」と書いてゐる。

大きな石摺の「雷」の一字、嚴しく冷たい支那の陶器、これはこの樓の主人鷗外先生を象徴するものでなくて何であらう。

杏花追憶

香を焚き額を伏せどもまこと世にその人な
しと思ほえなくに

考へて見ると私が、市川左團次君に會つてから、三十數年の歲月が過ぎた。自由劇場の第一回の試演が有樂座に於て行はれたのが、明治四十二年十一月廿七八の兩日のことだつたから、それから推測して記憶を辿つて見ると、その一二年前に小山内薰氏によつて左團次君と私とは、相知ることが出來たのだつた。新富町の町角にあつた左團次君の家を訪ねたことも、上野櫻木町の美術學校の近くにあつたその閑居を驚かせたことも、今猶はつきり覺えてゐる。新富町のお宅の水口

の障子、櫻木町の忍び住居の「萍殿」の額、さういつたものも今考へて見ると、みんな懷しいものばかりである。左團次君も私もその時分はまだ年が若く、これから大いに仕事をしやうといふので、意氣盛んなるものがあつたが、殊に左團次君は小山内薫氏とともに、自由劇場を始める直前のことで、唯ちよつと顏を見ただけでも、颯爽たるものが感じられた。

自由劇場の試演が數回に亙つて行はれた中で、私の心に殘つてゐるものは、何といつても「ジョン・ガブリエル・ボルクマン」と「夜の宿」の二つである。作者イプセンに似せて扮つた左團次君のボルクマンの髯の白い顏も、劇中聽えて來る不氣味な靴音や橇の鈴の寂しい響も、今なほ私には忘れられない。左團次君のサチンや左升君の巡禮ルカのいたましい姿も、舞臺でみんながうたふ「牢屋は暗い鬼めが覗く」といふあの絶望的な唄の聲も、これまた今猶私には、忘れることの出來ないものなのである。兎に角あれだけの感激を私達に與へて、新劇勃興の機運を作つたことだけでも、左團次君と小山内薫氏との名前は　永遠に日本演劇

史中の或る輝かしい一頁のうへに、牢記されなければならないであらう。

しかし左團次君の俳優としての業績は、唯自由劇場の仕事ばかりに限られてゐるものではない。私はもつと廣く大きな意味で左團次君がこの三十年來續けて來た普通興行における不斷の努力、少しでも演劇の向上を圖らうとしてゐる沈默の精進に對して、左團次君の業績を認識しなければならないと思ふ。もつと具體的にいへば往年の明治座籠城以來、岡本綺堂氏といふ名作家を得てからの左團次君の業績をいふのであつて、私は今でも「修禪寺物語」「鳥邊山心中」「番町皿屋敷」「貞任宗任」「室町御所」等の初演の舞臺を忘れることが出來ない。殊に「修禪寺物語」の夜叉王の最後の幕切れの力強い姿は、今でもはつきり私の目に殘つてゐる。その後京都の智恩院の境内で行はれた大野外劇「織田信長」の時のことも、劇壇空前の壯圖として、高く聳えた山門の樓上に現れた左團次君の信長、壽三郎君の光秀などの姿が、今なほ眼底に殘つてゐるが、それも何時しか十數年前の過去のこととなつてしまつた。その時一緒に京都に往つてゐた永井荷風氏も、

「濹東綺譚」の巻後言の中で「花の散る如く、葉の落るが如く、親しかつた彼の人々は一人一人相ついで逝つてしまつた」といつてゐるが、事實左團次君の演劇に於ける好伴侶であつた小山内薫氏も、既にもうこの世の人ではなく、當の左團次君も今ではもう、この世に於て相見ることの出來ない人となつてしまつた。

わが杏花子逝いてから既に二年、時の過ぐるのは早いけれども、追憶の情は新たなるものがある。

我鬼の歌

小夜ふけて眠り藥を嚥むこころ死にたる友を
かなしむこころ

私は殆ど籠居に時を過してゐるので、不圖した機縁から一通り芥川龍之介君の

作品を、再び讀み返して見る時を得た譯であるが、落莫たる部屋の中で秋風の音を聽きながら、全篇悉く藝術的精進そのものだといつてもいいと思はれる作品を讀んでゐると、何だか血痕斑々たる戰袍でも見てゐるやうな心持がして、一種の鬼氣をさへ感ずることが出來たのであつた。

それに私が今度切實に感じたことは、その後半期の作品から窺知することの出來る、あからさまには、文字の上に現してゐないところの思想的苦悶が、如何に激しく嚴しいものであつたかといふことである。つまりは改造社版「芥川龍之介集」の巻頭小傳中にいつてゐる「死後現れた多くの批評の中で、特に注目すべきは、ある社會運動家がこれをペトロニウスに比した一語であつた。なるほどペトロニウスも芥川氏も、過ぎ去く階級の最高教養を綜合してゐた意味で、又新しきものの胎動に全然盲目ではなかつたが、併し今更自分では如何とも出來なかつた點で似てゐたといへやう」といふ言葉が、暗示してゐるところの苦悶なのであつて、それは芥川君が自らその命を絶つまで、背に負つて往かなければならなかつ

た「業」といつた方がいいかも知れない。

人間は誰しも「業」を背負つてゐるのであるが、芥川君の後半期の作品を讀んだ時位、痛切にそれが感じられたことがない。それだから私は、皮肉や諷刺や機智に富んだ「侏儒の言葉」などを讀んでゐても「人生は一箱のマッチに似てゐる。重大に扱ふのは莫迦々々しい。重大に扱はなければ危險である」とか、「忍從はロマンティックな卑屈である」とかいふやうな警句的なものよりも、「古人は神の前に懺悔した。今人は社會の前に懺悔してゐる。すると阿呆や惡黨を除けば、何びとも何かに懺悔せずには娑婆苦に堪へることは出來ないかも知れない」といふやうな、人生的であるものの方に心を惹かれる。

芥川君の暗澹たる心持は、餘技として作つてゐた歌や句などにも現れてゐて、「吉井勇に戲る」として私に呉れた歌のうちの一首、

赤寺の南京寺の痩せ女餓鬼まぎはまぐとも酒なたちそね

の如きも、その歌の現さうとしてゐる諧謔よりも先に、私には一種の鬼氣が感

じられてならないのである。が、それでも芥川君は歌や句になると、如何やらほつと息を吐いてゐるらしい氣安さが感じられる。さういふ意味で私は次に擧げるやうな歌を愛することが出來る。

遠山にかがよふ雪のかすかにも命を守ると君に告げなむ　（室生犀星君に）

しぐれふる街を幽けみここにして海彼の本を愛でにけるかも　（丸善の二階）

朝顔のひとつは咲ける竹のうらともしきものは命なるかな

冬心の竹の畫見に來ひさかたの雪茶を煮つつわが待つらくに　（香取先生に）

私は今度圖らずも機緣を得て、久しぶりで芥川君の作品を再び讀み返して見たのであるが、その中で私が最も親しみを持つことが出來たのは、その餘技である歌であつたといふことは、結局私が「末の世のくどきの歌」の歌つくりであるがためであらうか。そんなことを考へると、いささか憮然たるものがある。

私は今でも時々催眠劑を嚥まなければ眠られない夜があるが、さういふ時にきつと思ひ出すのは、亡き友我鬼がこの世に殘した歌である。「斷ちそね」といつ

てくれた酒も、既に断つてから二年になる。

鑑賞篇

大觀の藝術

國を思ふ雄ごころをもて筆を取るわが大觀や
いまだ老いずも

昭和七年六月頃のことである。横山大觀氏は東京朝日新聞の學藝欄に、「美術教育の根本精神を論じて當面の問題に及ぶ」といふ、慷慨淋漓たる一文を發表されたが、これは當時での快文字であつた。

この一文はその頃東京美術學校の首腦者が更迭されたのに際して、同氏が多年抱懷して居られた意見を、やや激越な調子で述べられたものであつて、近頃めづらしい悲憤慷慨の志士的文章であるだけに、強く胸を打つものがある。

「抑も丹青の藝は文辭の學に先だつて生れ、文辭とともに榮え、文辭の能くせざ

る所を能くし、遂に今に今日の盛りを見る」といふ冒頭の一節を讀んだだけでもひどく現代離れのした高邁の氣が感じられて來る。

私は當時美術學校の校長に一洋畫家の任せられたことの是非については、全く門外漢で分らないけれども、それに對して大觀氏が多大の不滿を感じ、斷乎として排擊すべしとまでいつて居られる心持は、私にもいくらか分るやうに思ふ。私も若し日本畫家であつたならばこの場合やはり大觀氏と同じやうな說を唱へて、祖國藝術のために悲憤の情を洩らしたかも知れない。

が、要するに大觀氏の說くところは、「畫の貴き所以のものは作者貴き故」であるから、部分的末技に墮さずに、全的人格の修養をしなければいけないといふのであつて、もつと端的にいへば藝の眞髓は志氣にありといふのではないかと思はれる。そしてその結論としては「祖國藝術を尊べ」といふ一語に盡きるのであつて、別に大觀氏を煩はすほどの所說でもないのである。

私はこの大觀氏の意氣の壯なるには感ずるものであるが、それと同時に正岡子

規が「墨汁一滴」の一節で中村不折を論じた中に、次のやうな一句があつたのを思ひ起さずにはゐられなかつた。

「畫く者は論せず、論ずる者は畫かず」

大觀氏のいふ「祖國藝術を尊べ」といふ言葉は、唯日本畫ばかりでなく、私が廿年來親しんで來てゐるところの、歌に對してもいへるのであつて、大觀氏も至極いい標語を考へて呉れたものだと思つてゐる。元來歌は畫よりも更に古い傳統を有する文學であつて、古事記にある須佐之男命の作といはれる「八雲立つ出雲八重垣妻ごみに八重垣つくるその八重垣を」といふ歌を最古のものとすれば、この位立派な祖國藝術はないのである。

私はたしか「和歌入門」といつたやうな本に、歌は一種の宗教であるといふやうな意味のことを書いたことがあるが、さういふ感は近頃になつていよいよ深い。殊に大觀氏の所說を讀むに及んでからは、歌ばかりでなく畫もまた一種の宗教であつて、結局藝術即宗教といふことになるのではないかと思はれて來た。

私は洛北に居を定めて以來、以前にもまして歌に親しみ、これまで殆ど顧みなかつた多くの人の歌にも目を通してゐるが、それを見てゐると人情の諸相が、さまざまの形で現されてゐて、僞りのない人間の姿をまざまざと見ることが出來るのである。そして私はそこにまた、如何に多くの人が光明を求めて、暗い人生の路にさまよつてゐるかといふことも知ることが出來る。さういふ場合歌を作ることによつてさういふ人達の心に、若し多少の光明を與へることが出來るとしたならば、歌もまた、一種の宗教であるといふことも、いへないことはなからうと思ふ。畫もまたこれと同じことであることは、大觀氏の說くところによつて見ても明らかである。

私は昭和十六年十月、京都岡崎の美術館に於て開催された、日本美術院の展覽會を見に往つた時、そこに展觀されてあつた大觀氏の「輝く大八洲」と題する繪卷を見て、十年前に彼の說いてゐた藝術觀が、ありありとここに示されてゐるのを感じたのであつた。

芋錢河童圖

おのづから心に迫る墨のいろ芋錢河童圖冴え
にたらずや

小川芋錢はその著「俳畫の描き方」の自序に於て、「畫も亦道に入つて始めて尊い」といひ、或ひはまた「誠の心に遠ざかるの俳畫は眞の俳畫ではない」ともいつてゐるが、これ等の言葉は、短いけれども甚だ含蓄の深いものであつて、芋錢子自身の藝術觀を端的によく現してゐる。

猶芋錢子はこの書中に於て、

「俳畫は則拙を尙ぶものである。拙とは巧と對立する稱呼で、純朴を以て體とする。それ故技巧らしいものを斥け、無技を以て用とする。此を以て無礙自在の天

心に遊びて天童の如くに微笑む。是れ俳畫の心境である」

といつてゐるが、畫に對する心がまへもここまで來ると、もう一種の宗敎であつて、禪居士の接心と何等異るところがない。

芋錢が如何なる人物であつたかといふことについては、齋藤隆三氏がその著「大痴芋錢」の冒頭に語つてゐるところが、最も簡にして要を得てゐるやうに思はれるから、それを引かう。

「芋錢は自ら愚癡を以て任じて居つた。時に芋錢痴子と落款したこともあつた。印章にも芋錢痴と刻したものを用ひたこともあつた。又晩年にはよく良寛を寫したが、それには好んで大愚と題した。大愚良寛は人もいふところではあるが、芋錢がいつて初めて特種の味の見えるのを覺える」

そして更に齋藤氏は、

「寔に芋錢こそ大愚ともいふべきであり、大癡ともいふべきであらう」

といつてゐるのであるが、この「大癡」といひ「大愚」といふところに、畫仙

芋錢子のすべてのものが包含せられてゐるのである。

私が芋錢の繪を愛するのは、かなり久しい以前からであるが、その多くの作品に接することが出來たのは、昭和十六年七月京都岡崎公園の美術館で觀たのが始めてであつた。

そこにはその遺作が七八十點集められてあつたが、その中には「樹下石人談」「沼四題」「野于燈」「丹陰霧海」「陶土之丘」「御風子」などといつた田園及び水村の風景を主としたものの外に、「水虎と其眷族」「水魅戲」「狐の嫁入」「傘の怪」といつたやうな山魅水妖を描いた作品も少くなかつた。中でもその最得意とするところの河童圖は、見てゐれば見てゐるほど神韻漂渺たるものが感じられて來て、その前に彳んで觀てゐるものは、次第にその幻怪不可思議な魅妖の世界に引き入れられて往つた。これ等の作品によつて見ると事實芋錢は、かういふ世界があるといふことを信じてゐたのに違ひなかつた。

私はそれ等の作品を觀て、家へ歸つて來ると直ぐ、その感激の失はれないうち

に、芋錢河童圖の歌を二十數首作つたのであるが、芋錢もまた俳句とともに、歌にも興味を持つてゐたと見えて、やつぱりその繪や人物のごとくに飄逸脫俗の味のあるものが、幾首か世に殘されてゐる。その中から二三首を擧げて見よう。

井戸端に洗濯しつつふと見れば淺茅にまじる花小豆あり

一人居りて疊に這はす寄居蟲の行方も知らず春雨の晝

默々と石にて在はす御佛は悲しかりけりたふとかりけり

愚庵の句

春の日をうつらうつらに見てありぬ愚庵和尚の
髯の剃杭(そりくひ)

私は以前から愚庵和尚といふ人物が好きで、今度洛北に居を定めてからも、近

くに住む中島菜刀君に愚庵の像を描いてもらひ、時々それを掲げてゐるが、近頃愚庵にも詩や歌の外に、いくつかの句作があることを發見して、私はちよつと愉快になつた。それは正岡子規に宛てた書簡の中にある、

まだ死なぬ雪の中にも梅の花

獨して急ぐ旅かは雪のそら

こたつして君和韻せよ十二勝

淨林の釜に我を獨でしぐらすな

見舞して我先だつも知れず雪の路

王進が馬曳く門の柳かな

等の句、それから新井愚哉に宛てた書簡の中にある、

埋火の夢を破るや釜の音

春雨に袖うるほふや破れ傘

の二句、その外にもまた鳥居赫雄、片岡政次、古崎權一の諸氏に宛てた書簡の中

にも、

淡路島前にかかえて歳暮かな

元日や屠蘇には醉はず船に醉

温泉場の新年裸體で御慶申しけり

等の數句がある。

愚庵の句は、その文章、詩、歌などに較べると、殆ど問題にならない位稚拙ではあるが、それでもよくその句を味つて見ると、何處かにやつぱり禪僧らしいところがあつて、凉風おのづから生ずるやうな境地がある。

湯本喜作氏の「愚庵と子規」といふ一文によると、子規は明治廿五年十一月十五日に虚子とともに訪れて、閑談に夜を更かしたらしく、「淨林の釜に昔をしぐれけり」といふ句がある。愚庵の「淨林の釜」の句は、この句に答へたやうなものであつて、その後明治廿九年に書いた子規の隨筆「松蘿玉液」の中にある愚庵訪問の記事も、やはり「木枯の淨林の釜つつがなきや」といふ句で終つてゐる。

「こたつして君和韻せよ十二勝」の句中にある十二勝といふのは、愚庵が清水の草庵に住んでゐた頃にみづから選んだものであつて、卽ちそれは、歸雲巖、靈石洞、梅花溪、紅杏林、清風關、碧梧井、棗子渓、採菊籬、錦楓崖、嘯月壇、爛柯石、古松塢の十二景をいふのである。愚庵はこの十二勝に、みづから詩と歌とを詠じ、天下の文人墨客にその唱和を求めたのであるが、その中から子規、虛子などの句を擧げるならば、「歸雲巖」には子規の、

　雲消えて花ある春の夕かな

といふのがあり、「嘯月壇」には虛子の、

　ふんどしを干す物干の月見哉

といふのがある。

それで若し私をしてこれ等愚庵の句の中から、最も好むものを選ましめるならば、私は直ちに、

　埋火の夢を破るや釜の音

の一句を擧げるであらう。これは茶禪一如の三昧境から生れた句だといつても、あながちいひ過ぎではあるまいと思ふ。

松の葉

　新しき船唄かなし松の葉の琉球組の唄のごと
　　くに

これは今から三十數年の昔、明治四十年の夏、與謝野寛、北原白秋氏等とともに、九州方面に旅行した時につくつた歌である。

私はその頃から「松の葉」が好きで、今でも時々出しては愛讀してゐる。これは元祿十六年に刊行された當時流行の歌謠集成といつたやうな本である。

今その中から私の好きな唄を二三拔いて見よう。

○とろりとろりと締むる目の、笠の内より締むりや、腰が細くなり候よ。

これなどは春信あたりの浮世繪の線の柔かさを思はせるやうな唄である。風にも堪へぬやうな艶女の姿が、ほのぼのとして目に浮んで來るではないか。

○腰に下げたる巾着は、これも憂き人の縫ぢやほどに。

唯單に素朴な唄に過ぎないやうであるが、繰りかへして讀んでゐるうちに、何ともいへないやうな綿々とした情味が、身にしみじみと感じられて來る。「憂き人」がいい。せめてかういふ唄でも作るやうな氣持に、もう一度なつて見たいものだが。

○思ふまいとの鉦を、ちんからころりと、打てば罰やら、猶思はるる。

率直な表現の中に、いろいろ複雜な感情が含まれてゐて、深く心の機微に觸れるものがある。「ちんからころり」といふ鉦の音が、今猶胸にひびいて來るやうな唄である。

○弓矢八幡寢はせねど、寢たと仰らば、何とせうぞの。

眞情惻々として人に迫るものがある。餘韻といはうか何といはうか、紅情縷のごとく盡きざるものがあるではないか。最初の「弓矢八幡」が實にいい。堪らなくいい。

○長崎の鷄は時知らぬ鳥で、眞夜中に歌うてうたうて、君を戻す。

「松の葉」の中に「長崎」といふ一組の唄があるが、それはみんな愛誦するに堪へたものばかりである。が、中でも私はこの唄が好きで、これにヒントを得て數年前のことだつたが、歌澤相模と寅右衛門のために、「長崎」といふ新曲を作つたことがあつた。

○くれなゐの三尺手拭、形見に見よとて置いてゆく。

これもやつぱり「長崎」の中の唄であるが、何だか南蠻の花手拭といつたやうなことが思はれて、如何にも長崎らしい情趣が感じられる。この唄を讀んでゐると、命がけの唐船商賣をやつてゐる荒くれ男の逞しい姿が、すつきりと目に浮んで來るやうな氣がする。

〇昔より今に渡り來る黒船、緣が盡くれば鱶の餌となる、さんたまりや。

これは同じく「長崎」の唄の中のひとつ。かういふ流行歌謠の中では、最も豪快なものといつてもいいであらう。「さんたまりや」がいい。私も前述新曲「長崎」の中で、「くるすの罰かおそろしや、さんたまりやも口のうち」といふ文句を使つた。

〇月は八幡のまだ空に、最往のいのとは思へども、後に心がとどまりて、後髮が引かるる、なんぼ戀には身が細ろ、二重の帶が三重廻る。

これは以前から私の愛誦するところのもので、實になだらかな調子の、それでゐてしみじみと身に染むところのある、「松の葉」中の絕唱である。寂しい時などにこれをひとりで口ずさんでゐると、ほのぼのとわれを忘れて、過ぎし日の夢が思ひ出される。

「松の葉」の中には、私の好きな唄はまだいくらでもある。しかしあんまりこんな唄を書いてゐると、「こころ亂れて遣瀨なや」といふやうな心持になつて、わ

が世が住み憂くなるといけないから、この位でやめておくことにしよう。

「土」を觀る

土に生き土にはたらく人ゆゑに王土たふとし
土にぬかづけ

私は洛北に住むやうになつてから、時々散歩の足を賑かな巷の方へ延ばして、新京極あたりの映畫街を訪れることがあるやうになつた。

しかし私は、唯單に映畫を娛樂として觀る大衆的愛好者の一人であつて、試寫を觀て作品の價値を云々するといふやうなことは、如何も私の趣味ではない。それだから私の映畫鑑賞は、河原町通りや新京極の方に散步に出掛けた時、不圖思ひ立つて見に入る程度のものであつて、要するに散步の延長に過ぎないのである。

それだから私は映畫を鑑賞するに當つても、直きにその原作の小說を考へたり或はそれから連想される歌や、詩のことを考へたりする。さういふ意味で內田吐夢君作るところの「土」は、近來稀に見る藝術的香氣の高い、叙情味の豊かな映畫として面白かつた。作品としては以前感激して鑑賞した「大地」の方が、これよりもずつと規模が大きく、民族的背景を持つたものではあつたが、詩的要素が多く、田園描寫の美しさのすぐれてゐる點では、到底今度の「土」には及び難い。それといふのが要するに、アメリカの通俗小說家であるパアル・バックと、日本の田園詩人である長塚節との、藝術家としての氣品の違ひが、まざまざと映畫の上に現れたものであつて、その點で「土」の方が「大地」よりも、遙かに優れてゐるのである。

それに私はこの「土」に對して深い興味を覺えたのは、それに映し出されて來る農村風景によつて、日頃から愛誦してゐる長塚節氏の歌が、それからそれへ、次ぎ次ぎに思ひ出されて來ることだつた。「寫生の歌」を作ることを、その信條

としてゐた長塚氏の作品であるだけに、映畫化されたものを見ても人に迫つて來る感銘の强さは「鍼の如く」その他の歌と相通ずるものがあるやうな氣がする。

私が試寫室の闇の中で、映し出される「土」の場面を見ながら思ひ出した歌を列擧して見るならば、先づ勘次が玉蜀黍を盜むところでは、

吾が心いたも悲しもともすりの黍の秋風やむ時なしに

といふ歌を、卯平老人が藁を打つてゐるところでは、

夜なべすと繩綯ふ人よ鍬掛の鍬の光はさやけかるかも

といふ歌を、何の場面だつたか蛙が微かに鳴くのを聞いて、

短夜の淺きがほどになく蛙ちからなくしてやみにけらしも

といふ歌を、それぞれ胸に思ひ浮べたが、それよりも私は風見章子のいたいけな田舍娘の姿を見て、

鬼怒川の篠に交れる鴨跖草は刈る人なしに老ゆといはずやも

といふ歌の中にある「鬼怒川の篠に交れる鴨跖草」のやうな氣がしてならなか

つたのである。

私は數年前に、土をたたへる歌を幾首か詠んだことがあつたが、今度映畫化された「土」を觀ると、一層さういつた心持を深く感じないではゐられなかつた。

私は敢て田園詩「土」の藝術的氣品の高さを讃へる。

昭和十七年四月廿五日印刷
昭和十七年四月三十日發行

雷

(停)定價 貳圓

著者　吉井勇（よしいいさむ）
京都市上京區北白川東蔦町二〇

印刷者　天理時報社
奈良縣丹波市町川原城
代表者　岡島善次

發行者　岡島善次
奈良縣丹波市町三島

發行所　天理時報社
大和　奈良縣丹波市町川原城
東京　東京市豐島區駒込六丁目八七五
文協會員番號一一九五〇一

配給元　日本出版配給株式會社
東京市神田區淡路町二丁目九番地

天理時報社刊行圖書

前川佐美雄著　**天平雲**　B・6・三二〇 函入上製本　(停)貳圓五十錢　〒十四錢

新浪漫派の驍將として、昭和新風の生みの親として、現歌壇における著者の存在ほど輝かしいものはない。昭和の晶子、昭和の茂吉、昭和の白秋と稱せられるのも宜なる哉。本書は著者最近の作のみにして、愈々圓熟の境に入つた作風は、形優に美しく内に火の如く激しきものを秘めた、まことの日本の歌の姿を思はしめる。

土岐善麿著　**歌・ことば**　B・6・三四〇 函入上製本　(停)貳圓　〒十四錢

歌人としての獨自の立場より、短歌と國語との問題に就て論じたるもの。長い傳統を持つ純粹なる我が國民文藝としての歌の表現に於て、『ことば』が如何やうに使はれて來たか。またその將來は如何。歌に關心を持つと持たぬに拘らず、日本人としては一樣に一讀される事を切望したい本書である。

田中克己著　**神軍**　B・6・一六〇 函入上製本　(停)一圓五十錢　〒十錢

今や大東亞戰爭の巨歩は、堂々として進められつゝある。大君の邊にこそ死なめと空に海に陸に我が皇軍のい向ふ所、仇なす者共は風にひれ伏す小草の如く破れてゆく。そのすばらしさ、勇ましさ、これぞ神のみいくさならずして何であらう。その神軍を讃え、日本人のまことの心を歌ひ、これこそはまさに日本の詩集！

天理時報社刊行圖書

カール・クロー著
吉田一次譯
中華外人物語
B・6・三四〇 (定)一圓八十錢 〒十四錢 上製本

著者は在支三十年に及び最近まで上海のイブニングポスト紙の主筆たりし米人。支那人化した米人として、極めて公平な眼を以て描いた英米人對支那人の交渉史話にして、興味溢るゝが中に對支問題解決の重要なる鍵を與へるもの。

竹内芳衞著
敬老の科學
B・6・三四〇 (定)一圓八十錢 〒十四錢 函入上製本

人生誰しも、いつかは迎へねばならぬ冬の日。その寂しい老境を如何に安らかに豐かに樂しく暮させるかは、一に老人に仕へる若き者、分けても主婦の深い同情と理解による。主婦たり、また主婦たらんとする若き女性には、是非讀んで貰ひたい。

中谷孝雄著
旅情
B・6・三四〇 (定)一圓八十錢 〒十四錢 函入上製本

すべて旅の記にして、嵯峨・吉野より始め、遠く滿洲・支那にも及んでゐて、著者の魂は常に日本精神の歸るべきふるさとを深く訊ねて歩いてゐる。そこに所謂紀行文としての域を超えて、全篇を貫く高い心の聲があり、日本精神の昂揚がある。

若林文次郎著
ボルネオ事情
B・6・二八〇 (定)一圓八十錢 〒十錢 普及版

三十年を蘭印に過した著者が、最も長く居住したボルネオに就て、その豐富な體驗と見聞を以て非常に平易に懇切に、地理・交通・氣候・產業・住民と係すところなく書かれたもので本書一冊は人々をしてよく直ちにボルネオに通せしむ。

天理時報社刊行圖書

中山正善	柿	B・6・二〇〇	(定)一圓八十錢	〒十四錢	上製本
中山正善	臺灣游記	B・6・二〇〇	(定)七十錢	〒八	上製本
岡島藤人	おちば	B・6・二〇〇	(定)七十錢	〒十二錢	上製本
柏木庫治	聲	B・6・三二〇	(定)一圓	〒十二錢	上製本
常岡一郎	終りなし	B・6・二〇〇	(定)五十錢	〒八錢	普及版
紅谷文雄	みくにぶり	B・6・三二〇	(定)一圓	〒十二錢	上製本
山添繁樹	みたみわれ	B・6・三二〇	(定)一圓二十錢	〒十二錢	上製本
荒井洋三	生きる道	B・6・三三〇	(定)五十錢	〒八錢	普及版
荒井洋三	生きる歡び	B・6・三三〇	(定)七十錢	〒八錢	普及版
九山時次	今日一日	B・6・三三〇	(定)五十錢	〒八錢	普及版

天理時報社新刊圖書

岩井孝一郎	皇國の子供	B・6・六四 普及版 價二十錢 〒四錢
福原登喜	〔繪本〕教祖様	B・6・二〇〇 上製本 價一圓九十錢 〒十二錢
白鳥鐵一	まるごと	B・6・二〇〇 普及版 價五十錢 〒八錢
橋本兼正	凡俗の言葉	B・6・三二〇 上製本 價五十錢 〒八錢
高橋兵輔	中川與志	B・6・四六〇 上製本 價二圓 〒十五錢
松浦豊藏	三つの速達	B・6・二〇〇 上製本 價一圓 〒十二錢
關 粂治	報恩の生活	B・6・二〇〇 普及版 價六十錢 〒八錢
助川靜二(少將)	有難き國日本	B・7・一二〇 普及版 價十五錢 〒四錢
柏木庫治	肺病に克つ心	B・6・三二〇 普及版 價一圓五十錢 〒十二錢
佐藤軍紀	黄土に祈る	B・6・四七〇 上製本 價二圓五十錢 〒十四錢

926
12

年 6 月 2 日

閲覧済

終